

二重心臓

夢野久作

青空文庫

不明の兇漢に

探偵劇王刺殺さる

孤児となつた女優天川呉羽あまかわくれはな哭いて復讐を誓う

秘密を孕む怪悲劇

市内大森区山王××番地轟九蔵氏とどろき（四四）は帝都呉服橋電車通、目貫の十字路に聳めぬき
立たつする分離派式五層モダン建築、呉服橋劇場の所有主、兼、日本最初の探偵恐怖劇興行
者、兼、現代稀有の邪妖劇名女優、天川呉羽嬢あまかわくれはの保護者として有名であつたが、昨三日
（昭和×年八月）諾威公使館ノルエに於ける同国皇帝誕辰たんしんの祝賀筵えんに個人の資格を以て列席もつ

後、大森山王××番地高台に建てられたる同じく分離派風の自宅玄関、応接間に隣る自室に於て夜半まで執務中、デスク前の廻転椅子の中で、平生同氏が机上にて使用していた鋭利な英国製双刃の紙切ナイフを以て、真正面より心臓部を刺貫され絶命している事が、今朝十時頃に到つて発見された。急報により東京地方裁判所より貝原検事、熱海予審判事、警視庁の戸山第一搜索課長以下鑑識課員、大森署より司法主任綿貫警部補以下警察医等十数名現場に出張し取調を行ったが、発見者である同家小間使市田イチ子の報告により真先に死骸の傍へ駆け付けた天川呉羽嬢が慟哭して復讐を誓つたにも拘わらず、犯人の目星容易に附かず。目下同邸を搜索本部として全力を挙げて調査中である。

因に轟九藏氏の原籍地は神奈川県鎌倉町長谷二〇三となっているが、同所附近で氏の前身を知っている者は一人も居ない。大正十年頃より三四歳の娘（今の天川呉羽嬢、本名甘木三枝（一九）本籍地静岡県磐田郡見付町××番地）を連れて各地を遍歴したる後上京し、株式に手を出して忽ち巨万の富を作った。その中に三枝嬢が成長し、人も知る如き美人となつたのを手中の珠と慈しみ、同嬢のために小規模ながら大森に現在の豪華な住宅を建ててやつて同居し、毎日のように同嬢を同伴して各種の興行物を見に行く中に、同氏自身、興行に興味を覚え、昭和五年の春、呉服橋劇場が不況に祟られて倒産

したもの、同劇場の支配人笠^{りゅうけい}圭之介氏に勧められるまにまに買取し、甘木三枝嬢
 こと女優天川呉羽をスターとする一座を組織し、且、新進探偵小説家江馬兆策氏を自宅
 の片隅に住まわせて、同氏に同劇場の脚本を一任し、巴里^{パリ}グラン・ギニョール座に倣^{なら}い
 探偵趣味、怪奇趣味の芝居で当てるつもりであったところ、当初の三四回の成功を見た
 のみで爾後一向に振わず、一部少数ファンの支持を除き、一般人士には早くも飽かれて
 しまったらしい。そのために財産の大部分を喪い四苦八苦の状態に陥ったまま今回の兇
 変に遭ったもので、兇行の原因等の一切も同時に秘密の奥に封殺された形になっている。
 勿論、遺書等も無いらしく、劇場の権利等の遺産は多分天川呉羽嬢のものとなる模様で
 あるが、気の毒にも同嬢は肉親の父親と同様の保護者を喪い、手も足も出ない天涯の孤
 児となってしまったので一般の同情を集めている。

惜しい好敵手

段原興行王 談

それは意外な事です。気の毒な事でしたね。私にとつては唯一の好敵手を死なしたようなものです。どうしてどうして。素人上りとは思えませんよ。あの種類の芝居を、あそこまでコナシ付けて来るのは尋常一様の凄腕で出来る事ではありません。私も内心で兜を脱いでおりました。元来轟君は金持に似合わない精悍な、腕力と自信の持主で、株式界にいた頃でも百折不撓の評判男だったそうです。劇界に転じても商売柄、各種の暴力団等に脅やかされた事が度々であつたのをその都度、自身で面会して武勇伝式の手段で追っ払って来た位で、強氣一方の人物でしたが惜しい事でしたな。天川呉羽さんの芸ですか。あれは大した天分ですね。あんな人は二人と居りませんよ。とにも角にもあの芝居だけは止めてもらいたくないものです。仏蘭西フランスと日本だけですからね。大東京の誇りと云つてもいいものですからね。云々。

~~~~~

八月四日の午後四時頃、大森山王の一角、青空に輝く檜かしの茂みと、ポプラの木立に包まれた轟邸の玄関の豪華を極めた応接室で、接待用らしいMCCを吸いながら、この夕刊記

事に額を集めていた二人の巡查が、同時に読終つたらしく顔を上げた。どちらも大森署の巡查であるが、一人は猪村<sup>いむら</sup>といつて丸々したイガ栗頭。大<sup>たい</sup>兵<sup>ひょう</sup>肥満の鬚<sup>ひげ</sup>男<sup>おとこ</sup>で、制服が張<sup>は</sup>千切<sup>ちぎ</sup>れそうに見える故参格<sup>こさん</sup>である。これと向い合つて腰を卸<sup>おろ</sup>した文月<sup>ふづき</sup>というのは蒼白い瘠<sup>し</sup>せこけた、貧弱そのものみたいに服のダブダブした新米巡查で、豊富な頭髪を綺麗に分けていたが、神経質な男らしくタツタ今読棄てた夕刊の記事を今一度取上げて、最初から念入りに読直し初めた。

猪村巡查はそうした若い巡查の熱心な態度を見ると何かしらニヤリと笑った。腮<sup>あご</sup>一面の無精鬚をゴリゴリと撫でまわして腕時計をチョット覗いたが、やがてブカブカした緞子<sup>どんす</sup>張りの安楽椅子に反<sup>そ</sup>りかえつて長々と欠伸<sup>あくび</sup>をした。

「ア——ツと……ここが搜索本部と発表しとるのに、新聞記者が一向遣つて来んじやないか」

「モウ朝刊の記事を取りに来る頃ですがね」

「司法主任はここを本部と見せかけて新聞記者を追払わんと邪魔ツケで敵<sup>かな</sup>わんというて、そのために僕をここによこしたんじやが、サテは感付かれたかな。近頃の新聞記者はカンがええからのう」

「司法主任は、よほどこの事件を重大視しておられるのですね」

「むろん重大だよ。被害者が被害者だし、事件の裏面によほど深い秘密があるものと睨んでいるのだからね」

「それにしても新聞記事の本文がアンマリ簡単過ぎやしませんか」

「ナアニ。新聞記者にはソナ気ぶりも匂わしちやおらんよ。この前よけいな事を素破<sup>すっぱぬ</sup>抜<sup>ぬ</sup>きやがった返報に、絶対秘密を喰<sup>く</sup>わせている。二三人来た早耳の連中が、夕刊の締切が近いので、それ以上聞出し得ずに慌てて帰って行った迄の事よ。しかしそれにしても良く調べとる。コチラの参考になる事が多いようだねえ」

「ヘエ。つまりこの新聞記事以外の事は、わかっていないんでしょうか」

「馬鹿な。まだまだ重大な秘密がわかつているんだよ」

文月巡査の眼がキラキラと光った。

「……ソノ……僕はツイ今しがた、非常で呼出されて来たばかりで何も知らないんですが。来ると同時に署長殿からモウ帰つても宜しいと云われたんで、実は面喰<sup>めんくら</sup>ったまま貴<sup>あ</sup>方に従<sup>なつ</sup>いて来たんですが」

「見せてやろうか……現場を……」

「ええ。どうぞ……」

「絶対に喋舌<sup>しゃべ</sup>つちやイカンよ。誰にも……」

「ハイ……大丈夫です」

「よけいな見込を立てて勝手な行動を執<sup>と</sup>るのも禁物だよ」

「……ハイ……要するに知らん顔しておればいいのでしよう」

「……ウン……新米の連中は警察が永年鍛え上げて来た搜索の手順やコツを知らないもんだから、愚にも付かん理屈一点張りで行こうとしたり、盲目滅法<sup>めくらめつぽう</sup>にアガキ廻<sup>かえ</sup>って却<sup>かえ</sup>ってブチコワシをやったりするもんじゃよ。こつちへ来てみたまえ。ドウセイ退屈<sup>たいくつ</sup>じゃからボンヤリしとつたて詰<sup>つ</sup>まらん。将来の参考に見せてやろう」

「ありがとうございます」

二人は丸腰のまま応接間をソツと出て、直ぐ隣室になつてゐる廊下の突当りの轟<sup>い</sup>氏の居室<sup>くしつ</sup>に這<sup>はい</sup>入<sup>い</sup>つた。流石<sup>さすが</sup>に豪華なもので東と南に向つた二方窓、二方壁の十坪ばかりの部屋に、建物の外観<sup>ふきわ</sup>に相応<sup>こけい</sup>しい弧型<sup>こけい</sup>マホガニーの事務机<sup>デスク</sup>、新型木製卓上電話、海岸傘<sup>ビーチパラソル</sup>型電気ス Tand、木枠正方形巻<sup>まきあけ</sup>上大時計、未来派裸体巨人像の額縁、絹紐煽風機、壁の中に嵌め込まれてゐる木彫寝台<sup>きぼり</sup>の白麻垂幕<sup>ドロシウオーク</sup>などが重なり合つて並んでゐるほかに、綺麗に拭き込

んだ分厚いフリント硝子ガラスの窓から千万無数に重なり合った檜の青葉が午後の日ざしをマトモに受けてギラギラと輝き込んで来る。盛んに啼いている蝉せみの声も、分厚い豪華な窓硝子ガラスに遮られて遠く、微かにしか聞こえず、壁が厚いせいであろう、暑さもさほどに感じられない。近代科学の尖端が作る妖異な気分が部屋の中一パイにシンカンとみちみちしている感じである。

「この家の中は随分涼しいんですね」

「どこかに冷房装置がしてあるらしいね……ところで見たまい。被害者はこの事務机デスクの前の大きな廻転椅子に腰をかけていたんだ。コレ。この通り、椅子の背中に少しばかり血が附いとるじやろう。被害者轟九蔵氏が、昨夜遅く机にかかって仕事をしている最中に、犯人が背後から抱き付いて、心臓をグツと一突き殺やつたらしいんだ」

「仲々手練てだれな事をやったもんですなあ」

「ピストルを使わぬところを見ると犯人も何か後暗い疵きずを持っていたかも知れんテヤ」

「さあ。どんなものでしょうか」

「とにかく尋常の奴じやないよ。急所を知つとるんじやから」

「兇器は……」

「兇器は今、署へ押収してあるが、新聞にも掲<sup>で</sup>ている通りこの机の上に在った鋭い、薄ッペラな両刃<sup>もうは</sup>のナイフだよ。僕もその死骸に刺さつとる実況を見たがね。左の乳の下から背中へ抜け通つたままになっていた。ホラこの通りこの血の塊<sup>かた</sup>まりの陰にナイフの刺さつた小さい痕<sup>あと</sup>があるじやろう」

「刺し方が猛烈過ぎやしませんか」

「むろんだとも。相当、兇悪な奴でも不意打にコレ程深くは刺し得ない筈だよ。それに死骸の表情が非常に驚いた表情じやつたし……」

「へエ。殺された当時の表情は、やつぱり死骸に残るものですかなあ。よく探偵小説なんかに書いてあります」

「残るものか。僕の経験で見ると死んだ当時の表情はだんだん薄らいで、一時間も経つとアトカタもなくなるよ。僕の見た轟<sup>しにが</sup>氏の死相はスツカリ弛んで、眼を半分伏せて、口をダラリと開けたままグツタリとうなだれて机の下を覗いていたよ。僕の云うのはその手足の表情だ。ハツとして驚くと同時に虚空を掴んだ苦悶の恰好が、そのまんま椅子の肱<sup>ひじ</sup>で支えられて硬直しておつたよ。新聞記者には向うの寝台へ寝かしてから見せたがね」

「ナイフの指紋は……」

「無かつたよ。犯人は手袋を穿めていたらしいんだね。それよりも大きな足跡があつたんだ。モウ拭いてしまつてあるが、向うの北向きの一番左側の窓から這入つて来たんだね。

ところでこの辺では昨夜の二時ちよつと前ぐらいから電<sup>いなびかり</sup>光がして一時間ばかり烈しい

驟<sup>しゅうう</sup>雨があつたんだが、その足跡は雨に濡れた形跡がない。ホコリだらけの足跡だからツ

マリその足跡の主は推定、零時半乃至一時四十分頃までの間にあの窓から這入つて来た事

になる。ところで又その足跡が頗<sup>すこぶ</sup>る珍妙なんで、皆して色々研究してみたがね。結局、地

下足袋か何かの上から自動車のチュウブ類似のゴム製の袋をスッポリと穿めて、麻糸らし

い丈夫なものでグルグルと巻立てた頗る無恰好な、大きな外観のものに相違ない。それも

この家の向う角の暗闇の中で準備したものに違いない事が、そこに落ちていた麻糸の切屑

で推定される……という事にきまつたがね」

「手がかりにはありませんね。それじゃあ」

「ならんよ。よく郊外の掃溜や何かに棄ててある品物だからね。なかなか考えたものらしいよ。探偵劇の親玉の処へ這入るんだからね。ハハハ……」

「最初に発見したのは小間使の……エエト……何とか云いましたね……」

「市田イチ子だろう。まだ十七八の小娘だがね。サツキ僕等を出迎えていたじゃないか……」

…気が附かなかった……ウン。その市田イチ子が今朝十時半過ぎだったと云うがハッキリしたことはわからん。毎朝の役目で今這入つて来た扉<sup>ドア</sup>をたたいて主人の轟氏を起しにかかったが、何度たたいても、声をかけても返事がない。部屋の中が何となく静かで気味が悪いので、台所女中の松井ヨネという女から合鍵を貰つて扉<sup>ドア</sup>を開いてみるとイキナリ現場が見えたのでアツと云うなり扉<sup>ドア</sup>を閉めると、その把<sup>ハンドル</sup>手に縋り付いたまま脳貧血を起してしまった。そいつを朋輩の松井ヨネが介抱して正氣付かせて、サテ、扉<sup>ドア</sup>の内側を覗いて見ると、思わず悲鳴を挙げたと云うね。しかも、これは氣絶するどころじゃない。キチガイのように喚<sup>わ</sup>めき立てながら二階へ駈上つて、女優の天川呉羽に報告した……というのが、あの新聞記事以前の事実なんだがね」

「それからその天川呉羽が泣いて復讐云々の光景をドウゾ……」

「ああ。あれかい。あれは今の松井という台所女中の話が洩れたもので、多少、新聞一流のヨタが混っているよ。第一呉羽嬢は泣きもドウモしなかったというんだ」

「へエ。泣かなかった」

「ウン。それがトテも劇的な光景なんで、傍<sup>そば</sup>に立つて見ていた今の松井ヨネ子は自分が氣絶しそうになったと云うんだ。……ちようどその時に天川呉羽嬢はチャント外出用の盛装

をして二階の自分の部屋に納まっていたそうだが、ヨネ子の報告を聞くとソツと眼を閉じて眉一つ動かさずに聞き終ったそうだ。それから幽霊のような青い顔になって静かに立上ると、音もなくシズシズと階段を降りて、まだ倒れている市田イチ子をソツと避けながら轟氏の居間に消え込んだ。あとから松井ヨネ子が、又氣絶されちや困ると思つてクツ付いて這入るのを、呉羽嬢は見返りもせず死骸に近付いて、血だらけの白チヨツキに刺さっている短剣の<sup>つか</sup>の処と、轟氏の死顔を静かに繰返し繰返し見比べていた……」

「スゴイですね」

「ウン。流石は探偵劇の女優だね。大向うから声のかかるところだよ」

「冗談じゃない……」

「それから今度は今の奇怪な足跡を、自分の足の下から這入つて来た窓の方向までズウツと見送ると、轟氏の魂が出て行つたアトを見送るように<sup>うやうや</sup>恭しく肩をすぼめて、心持ち頭を下げた」

「へエ。少々変テコですね」

「まあ聞き給え。それからタシカな足取で二三歩後に退<sup>さが</sup>つて轟氏の屍体に正面すると両手を合わせて瞑目し、極めて低い声ではあつたがハッキリした口調でコンナ事を祈つたそう

だ。……轟さん。妾が間違っておりまして……」

「妾が間違っていた……」

「ウン……「この敵讐はキツト妾の手で……」と……それだけ云うと又一つ叮嚀に頭を下げながら傍に立つている松井ヨネ子をかえりみた。普通の声で「お前。支配人の笠さんと大森の警察署へ知らして頂戴ね。御飯はアトでいいから……」という中に淋しくニツコリ笑ったという」

「ヘエエツ。豪い女があるものですね。まだ若いのに……」

「ハハハ。感心したかい」

「感心しましたねえ。第一タツタそれだけの間に、犯罪の真相を見貫いてしまったのでしようか。そんな事を云う位なら警察なんか当てにしくともいいだけの自分一個の見解を……」

「アハハ。何を云ってるんだい君は……これは彼女の手なんだよ。宣伝手段なんだよ」

「宣伝手段……何のですか」

「プツ。モウすこし君は世間を知らんとイカンね。俳優生活をやっている連中は代議士と同じものなんだよ。ドンナ不自然な機会を捉まえても自分の名前を宣伝しよう宣伝しよう

とつとめるのが、彼等の本能なんだ。彼等は舞台や議会だけでは宣伝し足りないんだ。所謂<sup>わゆる</sup>、転んでも只是起きないというのが彼等の本能みたいになってるので、この本能の一番強い奴が名を成すことを、彼等は肝に銘じているんだよ」

「驚きましたね。そんなに非道<sup>ひど</sup>いものでしょうか」

「論より証拠だ。天川呉羽がコンナ絶好のチャンスを見逃す筈がないんだ。果せる哉<sup>かな</sup>、新聞屋連中はこうした呉羽嬢の芝居に百パーセントまで引かかってしまって、まるで呉羽嬢の宣伝のために轟氏が殺されたような記事の書き方をしているが、吾々警察官は絶対にソナ芝居やセリフに眩惑されちゃいけないんだよ。下手な探偵小説じゃあるまいし、名探偵ぶった天川呉羽の御祈りの文句なんかを考慮に入れたり何かしたら飛んでもない間違いを起すにきまつているんだからね。誰も相手にしてやしないよ」

「成程<sup>なるほど</sup>ねえ。わかりました。しかし、それにしても、まだわからない事が多いようですね」

「何でも質問してみたまえ。現場に立会ったんだから知ってる限り即答出来るよ」

「第一……にですね。あの窓を明<sup>あ</sup>けて這入って来た犯人が、どうしてわからなかったのでしょうか被害者に……」

「ウム。豪い……そこが一番大切な現実の問題なんだよ。同時に司法主任、判検事も、首をひねっているところなんだよ。あの通り窓の締りは、捻込みの真鍮棒になつとるし、あの窓枠の周囲には主人の轟氏以外の指紋は一つも無い。しかも、それがあの窓に限つて念入りに、ベタベタと重なり合つて附いているのだから変梃だよ。よつぽど特別な……或る極めて稀な場合を想像した仮説以外には、説明の附けようがないのだ」

「ヘエ。轟氏がお天気模様か何かを見たあとで締りをするのを忘れていたんじゃないですか」

「どうしてどうして。被害者は平生から極めて用心深くて、寝がけに女中に命じて水を持つて来させる時に、一々締りを付けさせるし、そのアトでも自分で検めるらしいという嚴重さだ」

「それじゃ家内の者が開けて、加害者を這入らせたとでもいうのですか」

「つまりそうなるんだ……という理由はほかでもない。この事務机の右の一番上の曳出一に一挺のピストルが這入っていた。それも旧式ニッケル鍍金の五連発で、多分、明治時代の最新式を久しい以前に買込んだものらしい。弾丸も手附かずの奴が百発ばかり在ったが、それを毎日毎日手入れをしておった形跡があるのじやから、被害者の轟氏はズット以前か

ら何か知ら脅迫観念に囚とらわれておったことがわかる。それが仮りに他人から怨うらみを受けているものとすれば、やはりピストルと同じ位に古い因縁であつたばかりでなく、毎日毎日手入れをしておかなければならぬ位ヒドイ怨みであつた事が想像出来るじやろう。ところでその轟氏が恐れている相手が、向うの窓を轟氏の手で開けさせて這入つて来たのに、轟氏はそのピストルを手にしておらぬのみならず、自分で窓の締りをあけて導き入れたものとするれば、その人間は被害者の轟氏にとって、よつぽど恐ろしい人物であつたという事になる」

「そんなに恐ろしい脅迫力を持った人間が、この世の中に居るものでしょうか。自分を殺しかねない相手という事が、被害者にわかつていれば尚更じゃないですか」

「そこだよ。そこに何となく大きな矛盾が感じられるからね。判検事も司法主任も相当弱つていたらしいんだが、間もなくその矛盾が解けたんだ」

「ほう……どうですか」

「わからんかい」

「わかりませんねトテモ。想像を超越した恐ろしい事件としか思えませんね。これは……」  
「ナア二。それ程の事件でもなかったんだよ」

「へエ。どうしてわかつたんです」

「その事務机デスクの曳出ひきだしを全部調べたら、右の一番下の曳出から脅迫状が出て来たんだ」

「ホオー。何通ぐらい出て来たんですか」

「それがソノ……タツタ一通なんだ。僕はよく見なかったが、司法主任の横からチョット覗いてみると普通の封緘ふうかんハガキに下手な金釘流かなくぎでバリバリと書いたものじやつたよ。表書うわがきは単に大森山王、轟九蔵様と書いて、差出人の処書ところがきも日附も何もない上に、消印スタンプがドウ見てもハッキリわからん。一時は良かったが近頃の郵便局の仕事はドウモ粗慢でイカンね。司法主任はスツカリ憤おこつとつたよ。当局に申告して消印スタンプのハッキリせぬ集配局を全国に亘つて調べ出してくれると云つておつたが……」

「中味にはドンナ事が書いてあつたんですか」

「ただコレだけ書いてあつた。大正十年三月七日……芝居ではないぞ……と……」

「大正十年三月七日……芝居じゃない……」

「ウン。そうだ。それから泣いている娘……だか何だかわからんが、世間からは娘と同様に見られとるからそのつもりで話するが……その娘の甘木三枝あまきこと天川呉羽嬢を呼出して、その脅迫状を見せるとコンナ字体についてはチットモ記憶がない。文句の意味も何の事や

らカイモクわからぬ。前にコンナ手紙が来たような事実も記憶しておらんと云う」

「成る程。……そこでサツキの呉羽嬢のお祈りの文句に触れてみたかったですな。何か参考になる事を喋舌<sup>しゃべ</sup>らして……」

「ウン司法主任がチョット触れていたよ。ちょうどその時に、女中を訊問していた刑事の梅原君が、その事に就いて取あえず報告したもんだからね……すると果せる哉<sup>かな</sup>だ。……あれは妾<sup>わかし</sup>があの時口惜<sup>くや</sup>し紛れにそう申しましただけの事で、女の妾に何がわかりましょう。犯人が出て行つた方向を拝みましたのは、そうすると遠くに居る犯人が何となくドキンドキンとして思わぬ失策を仕出かすという迷信が、外国の芝居に使つてありましたのでツイ、あんな事を致しまして……と真赤になつて弁解しておつた。だから、つまり目的は宣伝に在つたのだね。これは彼等の本能なんだから、深く咎めるには当たらないよ。司法主任も検事も苦笑しておつたよ」

「ソレツキリですか」

「イヤ……それから呉羽嬢はコンナ事を云い出しおつた。……ハッキリとは申上られませんが、轟はこの四五日前から何だかソワソワしていたように思います。今までドンナ悲況に陥つておりまして、私を見ると直ぐにニコニコして何か話かけたりしておりましたも

のが、この頃はソナ<sup>けぶり</sup>気振も見せませぬ。ただ緊張した憂鬱な、神経質な顔をして、私が何か云おうとしましてもチラチラと瞬<sup>またた</sup>きした切り自分の部屋へ逃込んで行きます。もちろん、その原因は私にはわかりかねますが、轟の劇場関係と、財産関係の仕事は皆、呉服橋劇場の支配人の笠<sup>りゆうけい</sup>圭之介<sup>いのすけ</sup>さんが一人で仕切って受持っておられます。大正十年の三月七日といえ、私が三つの年の事ですから、何事も記憶に残っておりませぬ。私はその三つの年に何かの事情で、年<sup>とし</sup>老いた両親の手から引取られて轟の世話になって来ておりますので、それから今年までの二十年間、轟は独身のまま私を育てるために色々と苦勞をしておりますが、詳しい話は存じませんと巧妙に逃げおった」

「何か隠している事があるんじゃないですか」

「それがないらしいのだ。劇場主なんちういうものは一般の例によると相当複雑な生活をしているもんじやが、今の呉羽嬢や、女中達や、支配人の笠圭之介の話なんかを総合すると、この被害者ばかりは特異例なんだ。轟九蔵氏に限って非常に簡単明瞭な日常生活である。劇場付の女優に手を出したり、花柳の巷<sup>ちまた</sup>を泳ぎまわったりするような不規則は絶対にした事がない……という証言だ。全くの独身生活者で、ただ娘分の三枝を、世界一の探偵劇スターとして売出す事以外に楽しみはなかったらしいのだ」

「へエ。面白いですね。そうした変態的な男と女と二人切りの生活が、全くの裏表なしに継続出来るものでしょうか」

「アハハ。ナカナカ君は疑い深いなあ。まあこつちへ来たまえ。ユツクリ話そう」

二人は又、応接間へ引返して申合わせたように又もMCCを<sup>つま</sup>抓んだ。

「美味<sup>うま</sup>い煙草だなあ。一本イクラ位するもんかなあ。二十錢ぐらいはせんか」

「イヤ。そんなにはしないでしよう。二十錢出せば葉巻が二本来ますからね」

二人は互いちがいにコバルト色の煙を吹上げ初めた。

「君は天川呉羽と轟九蔵の性關係を疑つとるのじやろう」

文月巡査が忽ち赤くなつたが、そのまま微笑してうなずいた。

「ハハハ。ナカナカ隅に置けんのう君も……」

「やはり……その……何かあるんですか」

「ところが今のところ、何も疑わしいところがないんだよ」

「十分……十二分に疑つてみる必要があると思いますなあ。事によると今度の事件の核心はそこいらに在るかも知れませんかねえ」

「御高説もつともじやが……まあ聞き給え。こうなんだよ。二人の日常生活を説明すると

……これは二人の女中の陳述を綜合したものじゃが……先ず毎朝九時に娘の呉羽が先に起きて湯に這入る。女優としてはかなり早起の組だね。それから一時間ばかりかかって化粧をして、着物を着かえて出て来る」

「女中も何も手伝わないのですか」

「ウン。手伝わせるどころか、湯殿の入口をガツチリと鍵かけて、誰が来ても這入らせないそうだが、これは何か呉羽嬢が、天川一流ともいふべき秘密の化粧法を知っておつて、それを他人に盗まれない用心じやという話じやが……」

「それは女中の話でしょう」

「そうじゃ。……一方に天川呉羽嬢に云わせると私は自分の肌を他人に見られるのが死ぬより嫌いです。無理にでも見ようとする人があつたら、私は今でも自殺します……といううちにモウ、ヒステリーみたいに顔を歪めて眉をピリピリさせおつたわい。ハハハ」

「すこし云う事が極端ですね。何か身体からだに刺青ほりものでもしているのじやないでしょうか」

「そんな事かも知れんね……ところでそうやって浴室から出て来た呉羽嬢の姿を見ると、何度出合うてもビックリするくらい美しい。青々とした濃い眉が生え際に隠れるくらいボーツと長い。睫まつげが又西洋人のように房々と濃い。眼が仏蘭西人形フランスのように大きくて、眦まなじりが

グツと切れ上っている上に、瞳がスゴイ程真黒くて、白眼が、又、気味の悪いくらい青澄あわすんで冴え渡っている。その周囲を、死人色しびとの青黒い、紫がかったお化粧でホノボノと隈取って、ダイヤのエース型の唇を純粹の日本紅で玉虫色に塗り籠めている……」

「ハハハ。どうも細かいですなあ」

「女中がソウ云いおったのじゃからなあ……オット忘れておった。鼻がステキだと云うのだ。芝居のお殿様の鼻にでもアンナ立派な鼻はない。女の鼻には勿体ないと女中が云いおったがね。ハハハ……女じゃからそこまで観察が出来たもんじゃ。そいつが四尺近くもあろうかと思われる長い髪を色々な日本髪に結うのじゃそうなが、髪結いの手にかけて髪か毛みが余みつて手古摺てこずるのでヤハリ自分で結うらしい」

「してみると入浴の一時間は長くないですな。寧ろ短か過ぎる位ですな」

「何でも呉羽は早變りの名人だけに、余程手早く遣るらしい。それからこの頃だと紅色の燃え立つような長襦袢じゆばんに、黒っぽい薄物の振袖を重ねて、銀色の帯をコックリと締め上げて、雪のようなフェルト草履ぞうりを音もなく運んで浴室から出て来ると、とてもグロテスクで、物すごくて、その美しくさというものは、ちょうどお墓の蔭から抜け出た蛇の精か何ぞのような感じがする。恐怖劇の女優というが、真昼さなかに出合うてもゾーツとするの

う……ハハハ……これは勿論、吾輩の感想じゃが……」

「見たいですねえ。ちよつと……そんなタイプの女は想像以外に見た事がありません」

「ハハハ。そのうち帰つて来るからユツクリと見るがええ。しかし惚れちやイカンゾ」

「……相すみません……洋装はしないのですか」

「ウム。時々洋装もするらしいが、その洋装はやはり旧式で、帽子の大きい袖の長い、肌  
の見えぬ奴じゃそうなが、よく似合うという話じゃよ」

「へエ。それから今チヨツト不思議に思つたのですが、その呉羽嬢は湯殿の中からイキナ  
リ盛装して出て来るのですか」

「そうらしいのう」

「妙ですね。そうすると平生着ふだんぎというものを持たない事になりますね。……つまり外に出  
てから着かえはしないのですか……普通の女のように……」

「ハハハハ。ナカナカ君も細かいのう。探偵小説の愛読者だけに妙なところへ気が付くの  
う。そこまでは未だ調べが届いておらん」

「残念ですなあ。そこが一番カンジン、カナメのところかも知れないのに……」

「まあ話の先を聞き給え。それから十時頃に、その呉羽嬢が浴室を出ると、女中が主人の

轟九蔵を起しに行くが、コイツが又一通りならぬ朝寝坊でナカナカ起きない。それをヤツト起して湯に入れると間もなく朝飯あきはんになる。それから十二時か一時頃になって支配人の笠圭之介が遣つて来て三人寄つて紅茶か、ホット・レモンを飲みながら業務上の打合わせをする。時には三人で大議論をオツ初める事もあるが大抵のことは呉羽嬢の主張が通るらしい」

「その支配人の笠という男はドンナ人間ですか」

「僕に負けんくらい巨大な赭あからが顔おの、脂あぶらの乗り切つた精力的な男だ。コイツも独身という話じゃが」

「何だかヤヤコシイようですね。呉服橋劇場の首脳部の三人が揃いも揃つて独身となると……」

「ところがこの笠という男は有名な遊び屋でね。それも頗すこぶる低級に属しとる。つまらない女ばかり引っかけまわつて、この大森の砂風呂なんかによく来るので、自然吾々の仲間にも顔が通っている。臨検してみると「ヤア君か」といったアンバイでね。ハハハ。話すと面白い男だよ。誰でも初めて劇場で合うとこの男を劇場主の轟と間違える位、立派な風采じゃがね。そいつが来てその日の事務の打合わせが済むと、一時か二時頃から三人同伴で

劇場や、新聞社に行く事もあれば、別々に行く事もある。帰って来るのは大抵夜中の十二時前後で、その時も三人別々だったり一緒にいたりするが、早い奴から湯に這入って軽い夕食を摂る。笠支配人はいつも麦酒<sup>ビール</sup>を飲んで少々ポツとしたところで自動車を呼んで丸の内のアパートへ帰る……かドウか、わからないがね。残った二人の中で主人の轟<sup>うち</sup>は事務室の片隅の寝台へ寝る。呉羽嬢は二階の別室に寝るのじゃが、その時に呉羽嬢は寢室の鍵をやはりガツチリと掛けて、その上から今一つ差込<sup>かんぬき</sup>の門まで卸すとモウ誰が来ても開けない。もつとも寝<sup>の</sup>がけに睡眠剤を服むらしいがね」

「轟氏の方は……」

「呉羽嬢が「おやすみ」を云うたアトで三十分か一時間ぐらい手紙を書いたり何か仕事をするのが習慣になつとるらしいが、その時には必ず浴衣<sup>ゆかた</sup>に着換えている。そうしてこれも何か知らん薬を服<sup>の</sup>んでから寝るらしいがね」

「当日も変つた事はなかつたんですね」

「イヤ。あつたんだ。しかもタツタ一つ奇妙な事があつたんだ。少々神秘的なことが……」  
「へエ。神秘的と云いますと……」

「それが面白いのだ。この家の女中はズット以前……この家が建つた当時から二人きりに

定<sup>き</sup>まつている。こう見えてもこの家は案外広くないのだ。部屋らしい部屋はタツタ四室<sup>ま</sup>しかない上に、万事がステキに便利に出来ているからね……ところで一番古く、建った当時から居るのが今云うた松井ヨネ子という二十六になる逞ましい肉体美の醜<sup>オッペン</sup>女<sup>シャン</sup>だ。コイツが田舎出の働き者で、家の内外の掃除から、花畠の世話まで少々荒っぽいが一人で片付ける。しかも轟九蔵と天川呉羽の性生活について非常な興味を持っているらしく、そいつがわかるまでは断然お暇を貰わないつもりですとか何とか、吾々の前で公々然と陳述する位、痛快な女なんだ。何でもどこか極めて風俗の悪い村から来ているらしく、万事心得た面構えをしているが、しかし遺憾ながら、まだ二人の関係については突詰めた事を一つも掴んでいないので、ああした年頃の未婚の女にあり勝ちな悩みをこの問題一つに集中しているらしいんだね。この問題に限ってチョット突<sup>つ</sup>つくと直ぐに止め度もなくペラペラと喋<sup>し</sup>舌<sup>やべ</sup>り出しやがるんだ。どう見ても普通の親娘<sup>おやこ</sup>じゃありません……と熱烈に主張するんだ」

「なるほど面白いですね」

「ところが今一人居る市田イチ子というのは、やはり田舎からのポット出だが、今年十八になったばかり。つまりそうした好奇心の一番強い真盛りの娘ツ子で、やつと一昨日<sup>おとつ</sup>来たばっかりのところへ、先輩のヨネ子からこの話を散々聞かされた訳だね。それから呉羽

嬢の初のお目見得をしてみると、あんまり美しいのでビックリした拍子に呉羽嬢の姿がブロマイドみたいに眼の底に泌<sup>し</sup>み付いてしまつて、日が暮れたら怖くて外へ出られなくなつた。夜具を引つ冠ると眼の前にチラ付いてスツカリ冴えてしまつた……」

「アハハハ。形容が巧いですね」

「イヤ。笑いごとじゃない。その嬢が自身に白状したんだ。ところへ昨夜の事、女中部屋の扉<sup>ドア</sup>の真向いに当る廊下の突当りで、主人の居間の扉<sup>ドア</sup>がガチャリと開<sup>あ</sup>いた音がしたので、ハツと眼を醒まして無意識の裡<sup>うち</sup>に起き上り、鍵穴からソツと覗いてみると、いつも寝間着姿で仕事をしていると聞いていた主人が、チャント洋服を着ている。今しがた歸つて来て、イチ子自身がホコリを払つてやつた時の通りの黒いモーニングと白チョッキと荒い縞のズボンを穿<sup>ドア</sup>いている……つまり今朝<sup>けさ</sup>の屍体が着ていたのと同じものだね。のみならず主人の背後の扉<sup>ドア</sup>の蔭からチラリと動いた赤いものが見えた。大きな蛇が赤い舌を出した恰好に見えたのでギョツとして、頭から布団を冠<sup>かぶ</sup>つてしまつたが、あとから考えると、それはお嬢様の振袖と、紹<sup>ろ</sup>の襦<sup>じゆばん</sup>袢<sup>はん</sup>の袖だつたに違いないと云うんだ。……何でもその時に女中部屋の時計がコチーンコチーンと二時を打つのを夜着<sup>よぎ</sup>の中で聞いたというがね」

「ははあ……重大な暗示<sup>ヒント</sup>ですなあ。それは……」

「暗示<sup>ヒント</sup>? 何の暗示だというのだね」

「イヤ。別に暗示<sup>ヒント</sup>という訳ではありませんが、しかし、それはソナに遅くまで、轟九蔵氏と天川呉羽嬢があ事務室に居た証拠として考えてはいけないでしょうか」

「そうすると君は天川呉羽が轟九蔵を殺したというのかね。それだけの事実で……」

「イヤ。そんな怪談じみた想像説は、この場合成立しませんが、ツイ今しがた参りました奇妙なゴムチューブの足跡が、呉羽嬢と九蔵氏が一<sup>いっしょ</sup>所に居った時に這入って来たものか、それとも相前後して出入りしたものとすれば、ドチラが後か先かという事が、この事件を解決する重大な鍵となつて来ましょう」

「ウム。自然そういう事になるね」

「ところがその足跡の主が這入つて来て、出て行つたのが、お話の通り二時以前としますかね。雨が降り出してから帰つた形跡はないのでしょうか」

「ウム。ない」

「それから呉羽嬢が居たのが二時頃としますとドチラにしても二時以後は呉羽嬢がタツタ一人、轟氏の傍に居た事になります。そうすると二時頃までピンピンしていた轟氏を殺したものは絶対に呉羽嬢以外には……」

「アハハハハ。イヤ。名探偵名探偵。その通りその通り。寸分間違いない話だが……そこが探偵小説と実際と違ふところなんだよ。つまり君がアンマリ名探偵過ぎるんだ」

「……名探偵過ぎるつて……」

「つまり君はアンマリ考え過ぎているんだよ。犯人の目星はモウ付いているんだからね。寝<sup>ね</sup>呆<sup>ぼ</sup>けた小娘の眼で見た事なんか相手にせんでモット常識的に考えんとイカン」

「常識的と云いますと……」

「まあ聞き給え。こうなんだ。呉羽嬢は無論そんな真夜中に起きて、そんなに盛装なんかして九蔵氏の部屋に這入った覚えなぞ、今までに一度もないと云い張るんだ」

「それあそうでしょう」

「女中の市田イチ子の奴も、今になって考えてみますと何だか、自分の眼が信じられないような気がします。あれは私がトロトロした間<sup>ま</sup>に見た夢なのかも知れません……なんかとアイマイな事を云い出しやがるし……」

「云うかも知れませんか。そんな事をウツカリ証言したら、アトで呉羽嬢に何をされるか解りませんかね」

「君。想像は禁物だよ。チャンとした<sup>よりどころ</sup>拠点のある証言を基礎として考えなくちゃ……」

「モウ、それだけです。変った事は……」

「……アツ……それから今一つチョット変った事がある。何でもない事だが、君一流の想像を複雑にさせる材料には持つて来いだろう。ほかでもない……今朝、呉羽嬢の起きるのが約一時間ばかり遅れたんだそう。これも市田イチ子の証言だがね」

「ヘエ。いよいよ以て聞捨てになりませんね」

「ウン。平生は女中いつもに起されなくとも、キツチリ九時には起きて来た呉羽嬢が、今朝に限って九時半頃まで起きないので、ヨネとイチの二人の女中が顔を見合わせたそう。どうかしたんじゃないかというので二人がかりで起しに行ってみたらグーグー寝ている気はいがする。それを猛烈に戸をたたいたり、叫んだりしてヤット起したりしたら、不承不承に起きて来た。真白はぶたえい羽二重のパジャマを引っかけながら、どうも昨夜、催眠剤おくすりを服み過ぎたらしいと云い云い湯に這入ったというんだ」

「ヘエ……わからないなあ」

と云ううちに文月巡査は、眼め前まえの机テーブルの上に身体からだを投げかけて両脇を突いた。シツカリと頭を抱え込むと、溜息と一所に云った。

「スツカリわからなくなっちゃった」

「何がわからんチューのか……ええ？」

「……もし、それが事実なら、やつぱり呉羽嬢が九蔵氏を殺したのじゃない。不思議な足跡の主……つまり九蔵氏を脅迫した奴が殺したんだ」

「ホオ。なかなか明察だね。どうしてわかる」

若い文月巡査の蒼白い額はジツトリと汗ばんでいた。眼の前の空間を睨んで、魘うなされているような空虚な声を出した。

「呉羽嬢と、その犯人とは連絡がある……九蔵氏を殺した犯人が無事に逃げられるように、わざと朝寝をして、事件の発覚を遅らした……」

「ワツハツハツハツハ。イカンイカン。イクラ名探偵でも、そう神経過敏になっちゃイカン。世の中には偶然の一致という事もあれば、疑心暗鬼という奴もあるんだよ。シツカリし給え。アハアハア……」

文月巡査は夢を吹き飛ばされたように眼をパチクリさして猪村巡査の顔を見た。吾われに帰って頭の毛を叮嚀に撫で付け初めた。

「しかし……それは事実でしょう……」

「おおさ。無論事実だよ。しかもよく在勝ありがちの事実さ。しかも、それよりもモット重大な

事実があるんだから呉羽嬢の寝過し問題なんかテンデ問題にならん」

「ドンナ事実です」

「今話した支配人の笠圭之介ね。その笠支配人が台所女中のヨネからの電話で、丸の内のアパートから自動車で飛んで来たのが、今日の十二時チョット前だった。それから主人の死体や何かを吾々立会の上で調べている中に、机の上に小切手帳が投出してあるのに気が附いた。調べてみると、昨日の日附で堀端銀行の二千円の小切手を誰かに与えている事がわかった。そこで万が一にもと気が付いて、堀端銀行に問合わせてみると、今朝の事だ。堀端銀行が開くと同時に二千円を引出して行った者が居るといふ。それは紹の羽織袴に、舶来パナマ帽の立派な紳士であつた。色の黒い、背の高い、骨格の逞しい肥った男で、眉の間と鼻の頭に五分角ぐらいの万創膏を二つ貼っていたので、店員は最初何がなしに柔道の先生と思っていた。それだけに至極沈着しているようであつたが、しかし這入ってから出るまで一言も口を利かず、何気もない挙動の中に緊張味がみちみちて、油断のない態度であつた。尚、新しいフェルトの草履を穿いて、同じく上等の新しい籐のステッキを握っていたという」

「それが犯人だと云うんですか」

「むろんそうだよ。その報告を聞いた笠支配人は、その小切手を誰も触らないように、紙に包んで保存しておいてくれと頼んで、直ぐにその旨を吾々に報告したがね」

「ナカナカ心得た男ですなあ」

「ウン。近頃の素人は油断がならんよ。つまりその犯人は轟九蔵氏に脅迫状をタタキ附けた後に、<sup>のち</sup>九蔵氏が約束通り事務室で待っているところへ、窓を開けさして這入って来た。それから二千円の小切手を書かせ、後難を恐れて不意打に刺殺<sup>さしころ</sup>し、発覚しない中<sup>うち</sup>に金を受取<sup>ゆくえ</sup>って行衛<sup>くわ</sup>を晦<sup>く</sup>ましたという事になるんだね。つまり九蔵氏が……もしくは轟家の連中が、普通よりも寝坊である事を熟知している犯人は、朝早くならば大丈夫と思って、堂々と金を受取りに行つたと思われるんだ。何でもない事のようにやが今の眉の間と、鼻の頭に貼った五分角ぐらいの万創膏が、アトで研究してみると実に手軽い、しかも恐ろしい効果のある変相術じやつたよ。余程、甲羅<sup>こうら</sup>を経た奴でないとコンナ工夫は出来ん。君もアトで実験してみたまえ、万創膏の貼り方と位置の工合で、同一人でも丸で見違える位、印象が違うて来るからなあ。おまけに運動家らしく肩でも振って行けば、誰でも柔道の先生ぐらいに思うて疑う者は居らんからなあ」

「その小切手に指紋はないでしょうか」

「ドツサリ附いている筈だよ。今調査中じやが、小切手を書いたこの家の主人のもの、受取った犯人のもの、銀行員のものすくなと些くとも三通りは附いている筈だよ。銀行に來た犯人は手袋を穿めていなかったんだからね。笠支配人は到つて腰の低い、ペコペコした人間じやが、流石さすがに鋭いところがあると云つて、皆感心しておつたよ」

「……ところで……その支配人と女優の呉羽は今どこに居るのですか」

「犯人の星が附いて嫌疑が晴れたので、直ぐに大森署へ來て、署長の手で諒解を得てもらつて、二人とも大喜びでそのまま呉服橋劇場へ飛んで行つたのが二時半頃じやつたかなあ。今が劇場の生死の瀬戸際というんでね。何でもこの記事が夕刊に出たら、満都の好奇心を刺戟して劇場が一パイになるかも知れないと云つてね。少々慌て気味で二人とも出て行つたよ」

「少々薄情のようですね。そこいらは……劇場関係の人間はアラユル階級の中でも一番薄情だつていう事ですが……この夕刊を見たら誰でも今夜は休場だと思ふかも知れないのに……」

「それは、わからないよ。見物人という奴は劇場こや関係者よりもモット薄情な、モット好奇心の強い人種だからね。何でも亡き轟氏の魂はあの劇場に残っているに違いないのだから、

今日の芝居を中止しないのが、せめてもの孝行の一つですと、眼を真赤にして云っていたがね。呉羽嬢は……」

「今何を演<sup>や</sup>っているのですか」

「何を演<sup>や</sup>っているか知らんが……アツ。そうそう。大森署へ切符を置いて行きおったつけ……新四谷怪談とか云っていたが……」

「へエ。そうするとアトはその犯人を捕まえるだけですね」

「そうだよ。相当スゴイ奴に違いないよ」

「そうすると疑問として残るのは……」

「疑問なんか残らんじゃないか」

「イヤ。これは僕が勝手に考えるんですがね。第一は被害者の轟九蔵氏が、その犯人を迎え入れた心理状態……」

「それは犯人を取調べればわかるじやろ」

「第二が、その屍体に現われた無抵抗、驚愕の状態……」

「無抵抗とは云いはいしないよ」

「けれども事実上、無抵抗だった事はわかっていでしょう。そんな場合には無抵抗の表

情と驚愕の表情とは同時に表現され得るものですし、同じ意味にも取れない事はないでしょう。のみならず、そうした被害者の犯人に対する気持は机の曳出<sup>ひきだし</sup>に在ったピストルを取出さずに、犯人を迎え入れた事実によつて、二重三重に裏書きされていやしませんか。犯人が被害者に対して、殺意を持つていなかった事を、被害者自身も洞察して、信じ切っていたらしい事も想像され得るじゃないですか」

「ううむ。そういえばソウ考えられん事もない。ナカナカ君は頭がええんだな」

「……そ……そんな訳じゃないですが……それから事件当夜の二時頃に主人の部屋に居た呉羽嬢の行動に関する秘密……」

「……あ……そいつはドウモ当てにならんよ。何度も云う通り市田イチ子の陳述がアイマイじゃから……」

「アトからアイマイになったんでしよう。ですから一層的確な意味になりはしませんか」  
「中々手厳しいね。僕が訊問されとるようだ」

「ハハハ。いや。そんな訳じゃないですが……アトは轟九蔵氏の絶命時間の推測です。昨夜何時頃という……」

「ハハハ。二時以後だったら断然、呉羽嬢をフン縛るつもりかね……君は……」

「その方が間違いないと思います」

そう云う文月巡査の顔からは血の気がなくなっていた。背筋へ氷を当てられたような笑い顔をしながら三本目のMCCへわななくマツチを近付けた。そうした昂奮を気持よさそうに眺めやった猪村巡査は、毛ムクジャラの両手をノウノウと後頭部に廻した。

「ところがその絶命の時間がモウわかつているんだよ。サツキ本署へ電話をかけてみたら、一時間ばかり前に大学から通知が来たそうだ」

「ナ……何時頃ですか」

「今朝の三時半、乃至、四時半頃だというんだ」

文月巡査の手からマツチと煙草が落ちた。猪村巡査の顔を凝視したまま唇をわななかし  
た。

「ハハハ。よつぽど驚いたらしいね。ハハハ。小説や新聞の読者に云わせたら、女優を縛った方が劇的で面白いかも知れんがね。そうは行かんよ。犯人と轟九蔵氏との間には、何か知らん重大な秘密がある。だから一度出て行った犯人は轟九蔵氏の密告を恐れて引返し、推定の時刻に兇行を遂げて立去ったものとしたらドウだい。探偵小説にならんかね。ハハハハハ……」

笑殺された文月巡査は、いかにも不満そうに落ちた煙草を拾い上げると、腕を組んで椅子の中に沈んだ。眼の前の空気を凝視して、夢を見るようにつぶやいた。

（探偵小説……小説としても……事実としても……何だか間<sup>まちがい</sup>違<sup>まちが</sup>だらけのような危なっかしい気がしますなあ。ホントの犯人は別に在りそうな気が……）

「困るなあ。君にも……何でもカンでも迷宮みたいに事情がコンガラガツていなくちゃ満足が出来ない性分だね。犯人が意外のところ<sup>ところ</sup>に居なくちゃ納まらないんだね君は……」

「ええ。どうせ僕はきよう非番ですから、実地見学のつもりでお願いして、ここに連れて来て頂いたんですから、あらゆる角度に視角を置いてユツクリ考えてみたいと思ひまして……」

「考え過ぎるよ君あ……事実はモット簡単なんだよ」

「ドウ簡単なんですか」

「犯人はモウ泥を吐いているんだよ」

「ゲッ。捕まったんですかモウ……犯人が……」

「知らなかったかね」

「早いんですねえ……ステキに……」

「ハハハ。驚いたかい。……とはいうものの僕も少々驚いたがね。きょうの正午過ぎに上野駅で捕まったよ。大工道具を担いでいたそうだが、どうも拳動が怪しいというので、押えようとすると大工道具を投棄てるが早いか、まつしぐら地まちしぐらに構内へ逃込んだ。そいつが又驚くべき快速で、グングン分離して行くうちに、なおも追い迫って来る連中を撒くために走り込んで来た上り列車の前を、快足を利用して飛び抜けようとしたハズミに、片足が機関車のライフガードに引っかけた折れてしまった。運の悪い奴さ。まだ非常手配マズキがまわっていない中だからね。呉羽嬢の御祈禱が利いたのかも知れないがね……ハハハ……。そこへ大森署から電話をかけた司法主任が様子を聞いて、もしやと思って駆付けてみると、そいつが有名な生せいばん蕃ばん小僧という奴で、堀ほり端ばた銀行の二千元をソックリそのまま持っていた。小切手と鑑識課の指紋がバタバタと調べ上げられる。電光石火眼にも止まらぬ大捕物だったね。満都の新聞をデングリ返すに足るよ。何でも十年ばかり前に静岡から信越地方を荒しまわった有名な殺人強盗だったそうだ」

「……殺人強盗……」

「そうだ。そいつが負傷したまま大森署へ引っぱって来られるとスラスラと泥を吐いたもんだ。如何にも私は轟九蔵を殺しました。私はあの女優の天川呉羽の一身上に関する彼奴きやつ

の旧悪を知っておりましてので、昨夜の一時半頃、あそこで面会しまして、二千円の小切手を書かせて立去りましたが、アンマリ呉れっぷりがいいので、万一密告あしめえかと思うと、心配になつて来ましたから、今度は自動電話をかけて待つているように命じて引返し、十分に様子を探つてから堂々と玄関の締りを外させ、スリッパを揃えさせて上り込み、九蔵と差向いになつて色々と下らない事を話合っているうちに、どうも彼奴の眼色が物騒だと思いましたから、私一流の早業で不意打にやつつけました。それがちょうど三時半頃だつたと思います。そのまま窓から飛出してしまいました……恐れ入りました……」

「……ナアアンダイ……」

「アハハハ。恐れ入つたかい。ハハハ。モウ文句は申しません。潔く年貢を納めますと云つたきり口を噤んでしまつたのには少々困つたね。その轟九蔵との古い関係についても固くなつて首を振るばかり……しかし現場の説明から、殺す挙動まで遣つて見せたが、一分一厘違わなかつたね。野郎、商売道具の足首を遣られたんでスツカリ観念したらしいんだね」

「それにしても恐ろしくアツサリした奴ですね。首が飛ぶかも知れないのに……」

「殺人強盗の中にはアンナ性格の奴が時々居るもんだよ。ちようど来合せた呉羽嬢と笠支

配人にも突合わせてみたが、どちらも初めてと見えて何の感じも受けないらしい。ただ犯人が呉羽嬢に対して、すみませんすみませんと頭を二度ばかり下げただけで調べる側としては何の得るところもなかった」

「それからドウしたんです」

「どうもしないさ。推定犯人が捕まって自白した以上、警察側ではモウする事がないんだからね。君等と同じに非常召集をした連中がポツポツ来るのを追返してしまった。笠支配人と呉羽嬢も司法主任からの説明を聞いて大喜びで劇場に行ってしまった。それでおいさ。アハハハハ……」

「なあアんだい……」

猪村巡査は高笑いいしい立上った。文月巡査の背後にまわってダブダブの制服の背中を一つドシンとどやし付けた。

「ハハハ。馬鹿だな君は……そんなに探偵小説にカブレちゃイカンよ」

文月巡査は首筋まで真赤になってしまった。眼を潤ませながら真剣になって弁明した。

「……コ……これは僕の趣味なんです。ボ……僕の巡査志願の第一原因は、やっぱりメチャクチャに探偵小説を読んだからなんです」

「馬鹿な。探偵小説なんちういものは何の役にも立つもんじやない。その証拠に探偵作家は実地にかけると一つも役に立たん。自分の作り出した犯人でなければ絶対にヨオ捕まえんというじやないか……」

文月巡査は残念そうに深いタメ息をした。瞑想的な、幾分気取った恰好でMCCの煙を吐いた。

「ああ……タタキ附<sup>つけ</sup>られちやった」

「アハ……御苦労さんだ。トウトウ犯人を取逃しちやったね。フフフ……」

「どうも貴方<sup>あなた</sup>は意地が悪いんですなあ。早くそう云って下されあコンナに頭を使うんじやなかったのに……」

「そんなに頭を使ったかね」

「……どうも変だと思いましたよ。笠支配人と呉羽嬢に対する嫌疑がチットモ掛らないまま芝居へ行っちゃったんですからね」

「当り前だあ。その時にはモウ犯人の爪印<sup>つめいん</sup>が済んでいたかも知れん」

「へエ。それじゃあ……」

と文月巡査が妙な顔になつてキョロキョロした。

「ここが搜索本部と仰言つたのは……」

「ナアニ。あれあ嘘だよ。君が探偵小説キチガイで、まだ一度も実地にブツカツタ事がな  
いつて云つてたから、ちよつとテストをやつてみた迄よ。ちようど今日は僕も非番だつた  
から笠支配人に頼まれて、ここで留守番をしてやる約束をしたもんだからね。キツト退屈  
するに違いないと思つて君をペテンにかけて引っぱつて来たわけさ。どうだい面白かつた  
かい」

「ああ。つまんない……」

「アハハ。そう憤<sup>おこ</sup>るなよ。モウ暫くしたら夕食が出るだろう。その中に呉羽嬢が歸つて来  
たら一度見とくもんだよ。奥さんにいいお土産だ」

「……相すみません……僕はまだ未婚です」

「おほほう。そうかい。そいつは失敬した。そんなら丁度いい。夕飯を喰つてから一つス  
テキな美人を見せてやろう」

「へエ。まだ美人が居るんですか。この家に……」

「いや。この家じゃないがね。ツイこの裏庭の向う側なんだ。呉服橋劇場の脚本書きでね。  
江馬<sup>えま</sup>何とかという人相の悪い男が、妹と二人で住んでいるんだ」

「アツ。江馬兆策が居るんですか。コンナ処に……」

「何だ。君は知つとるのかいあの男を……」

「探偵小説を読む奴でアイツを知らない者は居ないでしょう。相当のインテリと見えますが、非常な醜男ぶおとこのオツチョコチョイ、一流の激情家の腕力自慢というところから、よくゴシップに出て来ます。芝居に関係している事は初耳ですが、田舎ダネの下らない探偵小説を何とか何とかといつてアトカラアトカラ本屋へ持込むので有名ですよ。彼奴あいつの小説を読むよりも、写真に出ている彼奴あいつの顔を見ている方が、よっぽどグロテスクで面白い……」

「その妹の事は知らないかい」

「妹が居る事も知りません」

「その妹というのが、真実の兄弟きょうだいには相違ないんだが、音楽学校出身の才媛で、兄貴とはウラハラの非常に品のいい美人なんだ。何でも、死んだ轟氏がパトロンで兄妹の学費を出してやったという話だが、その妹と轟氏との関係の方がダイブ怪しいらしい」

「ああ。もうソナ怪しい話はやめて下さい。ウンザリしちゃった」

「イヤ。今度の事件とは関係のない、全然別の話なんだ。何でもその歌姫ソプラノを轟氏が可愛

がつているお蔭で、兄貴までもが御厄介になつてゐるらしいという、松井ヨネの話だがね」

「ウルサイ奴ですね。アノめしたきおんな飯焚女は……」

「おお。女中といやあ今の小間使の市田イチ子もチョットういういしい、踏める顔だよ。紹介してやろうか。今に茶を持って来るから……」

「イヤ。モウ結構です。僕は帰ります」

「まあいいじゃないか。ユツクリし給え。君は女が嫌いかい」

「探偵小説があれば女は要りません」

「そんな事を云うもんじやないよ。まあ見て行けよ。別べつびん嬪の顔を……」

「イヤ。帰ります。お邪魔をするといけませんから……」

「アハハハハ。コイツはまいった……」

ちやうどその時分であつた。呉服橋劇場五階に在る呉羽嬢の秘密休憩室で、呉羽嬢自身と、笠支配人とが向い合つて腰をかけていた。

その秘密休憩室というのは、平生劇場用の小道具等を蔵しまつておく五階屋根裏の大きな倉庫の片隅を、ボロボロになつた金屏風や、川岸の書割などで二間四方ばかりに仕切つて、

これも小道具の塵埃塗れの長椅子と、歪になつた籐椅子を並べて、樂屋用の新しい座布団を敷いただけのもので、リノリウムの床とスレスレの半円窓の近くにカラカラに乾いた枯水仙の鉢が置いてあるのが、薄暗い裸電球の下で、そうした書割や金屏風と向い合つて、奇妙に物凄い、荒れ果てた気分を描きあらわして、今にも巨大な一つ目小僧の首か何かが……ウワア……とそこいらから転がり出しそうな感じがする。

しかし、それでも女優の呉羽にとつては、華々しい樂屋よりもこの部屋の方がズツと落付いて、気分が休まるらしかった。劇場そのものの人気はあまり立たなかつたが、それでも彼女個人としての人気は、全国の女優群を断然抜いて、三階の彼女の樂屋では訪問客を凌ぎ切れないために、彼女はよくこの物置の片隅の秘密室へ休憩に来るのであつた。

フロックコートの笠支配人はかなりの緊張した態度でイビツになつた籐椅子の上にかしこまつている。これに對した彼女は派手な舞台用の浴衣一枚に赤い細帯一つのシドケない恰好で、肉色の着込みを襟元から露わしたまま傍の長椅子に両足を投出しているが、モウ話に飽きたという恰好で、大きな古渡珊瑚の簪を抜いて、大丸髻の白い手柄の下を掻いていた。

「それじゃクレハさん。貴女と轟さんの間には何も関係はないんですね。普通の関係以外

には……」

呉羽は見向きもしなかった。

「何とでも考えたらいいじゃないの……イクラ云ったってわからない。どうしてソナに執拗しつこくお聞きになるの。下らない事を……」

「下らない事じゃないんです。これには深い理由があるのです……その……その……」

「アツサリ仰言じきいよ。モウ直、次の幕が開あくんですよ」

「この次の幕は……ですね。貴女は、そのまんまの姿で出て、亭主役の寺本蝶二君に槍で突かれるだけの幕じゃないですか。まだ二十四五分時間があります」

「ええ。でもそれあ妾の時間よ。貴方のために取つてある時間じゃないわよ」

「恐ろしく手酷いですな今夜は……下へ行くと新聞記者がワンサ待ちうけているんですよ。犯人の逮捕を警察で発表したらしいんですからね。どうしても僕じゃ承知しないんです。貴女あなたでなくちや……」

「新聞記者の方が五月蠅うるさくないわ。貴方の質問よりも……」

「そう邪慳に云うものじゃありません。だからよく打合わせとなくちや……その……これはこの劇場の運命と重大な関係のある話なんですよ。この劇場の運命は貴女あなたの御返事一

つにかかっていると云つてもいいんです」

「勿体振る人あたし嫌い……」

「いいですか……ビツクリしちや不可いけませんよ」

「余計なお世話じゃないの……ビツクリしようとしまいと……早く仰言いよ」

「それじや云いますがね……貴女あなたはね……」

「あたしがね……」

「この頃毎晩女中が寝静まつてしまつてから……轟さんの処へ押かけて行つて、結婚したいって仰言るそうじやないですか……ハハハ……どうです……吃驚びっくりしたでしよう……」

呉羽は見る見る中に硝子瓶うちがらすのように血の氣を喪つた。屹きつと身を起して笠支配人の真正面に正座して、唇をキリキリと噛んだまま睨み付けた。心持ち青味を利かした次の幕のメーキャップが一層物凄く冴え返つた。カスレた声が切れ切れに云つた。

「……それを……どうして……知つてらっしゃる」

笠支配人は鬼氣を含んだ相手の美しくさに打たれたらしかった。テラテラした脂あぶら顔がおの光りを急に失くして、両手をわなわなと握合わせながら腰を浮かした。

「……それは……ソノ……轟さんから聞きました。四五日……前の事です。轟さんは、思案に余って御座つたらしく、私に二度ばかりコンナ話をされたのです。劇場の地下食堂で轟さんと二人切りになった時です」

呉羽が深くうなずいた。すこし張合が抜けたらしかった。

「あなたが探り出した訳じゃないんですね」

「そうです。轟さんから直接に聞いたのです。クレハは俺を見棄てて結婚しようと思つてゐる。しかし俺はあのクレハを度外視してこの劇場をやつて行く気は絶対にない。クレハの結婚は俺にとつて致命傷だ。俺はドンナ事があつてもクレハの結婚を許す気にならん……とこう云われたのです」

「……………」

「そうして昨日きのう、二人で自動車で出かける時に又コンナ事を云われたのです……クレハの奴、飛んでもない人間と結婚しようと思つてゐる。あんな奴と結婚したら、クレハ自身ばかりじゃない俺までも破滅しなくちやならん。俺とクレハの一生涯の恥やしろを晒すことになるんだ。今夜こそ彼女の希望あいつをドン底までタタキ潰してくれる。たとい打殺うちころしても二度とアンナ希望を持たせないようにするつもりだ……と非常に昂奮していられましたがね」

呉羽は笠支配人の話の中に、それこそホントウにタタキ付けられたように椅子の中へ埋もれ込んだ。肩を窄めて<sup>すぼ</sup>眼を伏せたまま深い深いふるえたタメ息をした。

「一体あなたがその結婚したいと仰言る相手は誰なのですか。私は直接に貴女<sup>あなた</sup>のお口から聞きたいのですが、ドナタなのですか一体……面白い相手ならば私も一口、御相談相手になって上げたい考えですがね」

「……………」

相手が参っている姿をマトモに見た笠支配人は、思わずニンガリと笑った。頬杖を突いて身を乗出したいところであつたろうが、卓<sup>テーブル</sup>子が無いので仕方なしに腕を組んでグツと反身<sup>そりみ</sup>になった。なおなお呉羽を脅やかして、勝利の快感に酔いたい恰好であつた。

「……仰言れないでしょうね。こればかりは……へへへ。しかしコチラにはちゃんとわかつておりますよ。へへへ。お隠しになつても駄目ですよ……あなたのお父さん……だか、赤の他人だか知りませんが轟九蔵さんはその時に、こんなような謎を云い残しておられるのです。そのクレハの結婚の相手というのがアンマリ意外なので俺は全くタタキ付けられてしまったんだ。ほかでもないあの脚本書きの江馬兆策の妹のミドリなんだ。つまり同性愛という奴で、あの女に対してクレハの奴がとても深刻な愛を感じているんだね。俺はこ

の頃、毎晩仕事に疲れて、アタマがジイインとなつて、何もかも考えられなくなっているところへ、クレハの奴が又こんなような飛んでもない変テコな問題を持込んで来やがるもんだから、いよいよ考え切れなくなつて君に……つまり私にです……相談をかけてみるんだが、一体、俺はドウしたらいいんだろう……クレハの奴は幼少ちいさい時から無残絵描きの父親の遺伝を受けていると見えてトテモ片意地な、風変りな性格の奴であつたが、その上にこの頃、あんな芝居ばかりさせられて来たもんだから根性がイヨイヨドン底まで変態になつてしまつてゐるらしいのだ。あのミドリさんと同棲して、お姉さんお姉さんと呼ばれて暮すことが出来さえすれば妾はモウ死んでも構わない。これを許して下されば妾は新しい生命に蘇つて、モットモットすごい芝居を、モットモット一生懸命で演出して、今の呉服橋劇場の収入を三倍にも五倍にもしてみせる。そうしてミドリさん兄きょうだい妹を洋行させて頂けるようにする……今みたいな人間離れのしたモノスゴイ芝居ばかりさせられながら、何の楽しみも与えられない月日を送っていると妾はキット今にキチガイになります。今でも芝居の途中で、そこいらに居る役者たちの咽のど喉笛に、黙つて啖くいつ付いてみたくなる事がある位ですが、ホントウに啖くいつ付いてもよござんすか……つてスゴイ顔をして轟さんにお迫りになつたそうですね」

「……………」

「私はまだまだ色々な事を知っているのですよ。轟さんはズット前からよく云っておられました。あのミドリ兄妹は放浪者だったのを轟さんが旅行中に拾って来られたもので、兄に美術学校の洋画部を、妹に音楽学校の声楽部を卒業おさせになったものですが、兄の方の絵はボンクラで物にならず、とうとうヘボ脚本屋に転向してしまったのですが、これに反して妹の美鳥<sup>ミドリ</sup>の方はチョット淋しい顔で、ソバカスがあつたりして割に人眼に立たない方だけれども、よく見るとラテン型の本格的な美人で、しかも声が理想的なソプラノだ。もつともあのソプラノを一パイに張切ると持つて生れた放浪的な哀調がニジミ出る。涯しもない春の野原みたような、何ともいえない遠い遠い悲しさが一パイに浮き上るのが傷といえど傷だ。日本では現在、あんなようなクラシカルな声<sup>はやら</sup>が流行ないが、西洋に行ったら大受けだろう。俺はあの娘を洋行さしてやるのを楽しみに、ああやって家の庭<sup>うち</sup>の片隅に住まわせて、呉羽とも親しくさせているのだが、兄も妹も寸分違わない眼鼻を持っていながら、どうしてあんなに甚しい美醜の差が出来るのか、見れば見る程、不思議で仕様がな<sup>い</sup>。もちろん兄貴の方がアンナに醜い男だから大丈夫と思つて油断していたら、思いもかけぬ妹の方へクレハの奴が同性愛を注ぎ初めたりしやがったので俺は全く面喰らっている

……と仰言つたのですが、これはミンナ事実なのでしょうね。へへへ」

「……………」

呉羽は辛うじて首肯うんずいた。笠支配人も一つゴツクリとうなずいて膝を進めた。

「一体貴女あなたが結婚したいと仰言るのは誰ですか。ハッキリ仰言つて頂けませんか。この際

……」

「……………」

「アノ……アノ……作家の江馬兆策じゃないのですか」

「……………」

「どうも貴女あなたはあの男と心安くなさり過ぎると思つておりましたが……」

笠支配人の態度と口調が、だんだん積極的になつて来るに連れて、呉羽はイヨイヨ長椅子の中へ頰折れくずおれ込んで行つた。白手柄しろてがらの大きな丸髻まるまげと、長い髻たばと、雪のように青白い襟筋をガツクリとうなだれて、見るも哀れな位萎れしおれ込んでいるのを見下した支配人はイヨイヨ勢付いて、ここまでノシかかるように云つて来ると、又もや呉羽は突然に真白い顔を上げた。眉をキリキリと釣上げてハネ返すように云つた。

「ケ……穢けがらしいわよッ……ア……アンナ奴……」

「……でも……でも……」

笠支配人は度を失った。憤激いかりの余り肩で呼吸をしている呉羽の見幕に辛うじて対抗しながら、真似をするように息を切らした。

「でも……でも……貴女あなたは……いつも御主人の眼を忍んで……あの劇作家せんせいと……」

「そ……それはあの凡クラの劇作家せんせいに、次の芝居の筋書を教えるためなのよ。次の芝居の筋書の秘密がドンナに大切なものか……ぐらいの事は、貴方だって御存じの筈じゃありませんか。……ダ……誰があんなニキビ野郎と……」

そう云ううちに呉羽は見る見る昂奮が消え沈まつたらしく、以前の通り長椅子に両脚を投出した。今度は何やら考え込んだ、一種のステバチみたような態度に変わってしまった。そうした態度の変化には何となく不自然な、わざとらしいものがあつたが、しかし笠支配人は満足したらしかった。モトの通りに落付いた緊張した態度で、ジツと呉羽の横顔を凝視みつめた。

「それじゃ何ですね。貴女あなたは、轟さんに結婚の希望を拒絶されて、立腹の余りに轟さんを殺されたんじゃないんですね」

呉羽はサモサモ不愉快そうに肩をユスリ上げて溜息をした。

「失礼しちゃうわねホントニ。いつまで云つても、同じ事ばかり……執拗しつこいたらありやしない。ツイ今先刻さつき貴方と二人で大森署へ行つて、犯人に会つて来た計りばかじやないの」

「ええ。ですから云うのです。犯人が貴女あなたを見上げた眼が尋常じやなかったように思うのです。双方から知らん知らんと云いながら、犯人が涙をポロポロ流して、済みません済みませんと頭を下げているのを見た貴女あなたが、自動車に乗つてからソツと涙を拭いていたじやないですか」

「ホホ。あれはツイ同情しちゃつたのよ。犯人はどこかで妾に惚れていたかも知れないわ。コンナ女しょうばい優業ですからね、ホホ。……そういえば貴方を犯人が見上げた眼付の恨めしうで凄かつたこと。何かしら深い怨みがありそうだったわよ。知らん知らんとお互いに云いながら……」

「……そんな事はない……」

「だから妾もソナナ事はない」

「そ……それじや話にならん……」

「ならないわ。最初から……貴方の仰言る事は最初から云いばかりバツカリよ」

「云いばかりじやありません。つまり貴女あなたが結婚したいなんて仰言つたのは、轟さんに対

する何かの脅迫手段で、貴女の本心じゃなかったのですね」

「貴方はそう考えていらつしやるの」

そう云った呉羽の態度にはどこやら真剣なところがあつた。笠支配人は太い溜息をした。  
「ええ……そう考えたいのです。そう考えなければタマラないのです」

「ホホホ。面白い方ね貴方は……そんな事が、どうしてもこの劇場の運命と関係があるんですの」

「大いにあるんです」

笠支配人は急に勢付いたように坐り直した。颯爽たる態度で半身を乗出して、しなやかな呉羽の全身を見まわした。

「貴女も、もう相当に苦労しておられるんですからね」

「……さあ……どうですか……」

「呉羽さん……率直に云いましょうね」

「ええ。どうぞ……」

「僕と結婚してくれませんか」

呉羽は予期していたかのように、横を向いたまま、唇の隅で小さく冷笑した。その凄艶

とも何とも譬え<sup>たと</sup>ようのないヒツソリした冷笑が、呉羽の全身に水の流れるような美しくさを冴え返らせて行くのを見ると笠支配人は、思わずワナナキ出す唇を一生懸命で噛みしめた。ここが一生の運命の岐<sup>わか</sup>れ目と思い込んでいるらしい真剣味をもって、今一層グツと身を乗出しながら、男盛りの脂<sup>あぶらぎ</sup>切った顔を光らした。

「ね。おわかりでしょう。僕の気持は……今、貴方から拒絶されると、僕はモウこの劇場に居る気がしなくなるのです。もうもうコンナ劇場<sup>こやもの</sup>関係生活だの、探偵劇だのには飽き飽きしているのですからね。天命を知ったとでも云うのでしょうか。モット落付いた、人間らしいシンミリとした生活がしてみたくてたまらなくなっているのですからね」

「……………」

「但し……貴女が僕に新しい生命を与えて下さるとなれば問題は別ですがね」

呉羽は微<sup>かす</sup>かにうなずいた。ヒツソリと眼を閉じたまま……。

「……ね。おわかりでしょう。そうした僕の心持は……」

呉羽は一層ハッキリとうなずいた。

「ええ。わかり過ぎますわ」

「ね。ですから……ですから……僕と……」

笠支配人は青くなったり赤くなったりした。こうした場面によく現われる中年男の醜体を見せまいとしてハラハラと手を揉んだり解いたりした。

「ええ。それは考えてみますわ。女優なんてものはタヨリない儂いはかな商売ですからね」

「エッ。それじゃ……承知して……下さる……」

「まッ……待つて頂戴よ……そ……それには条件があるのです。妾も……ネンネエじゃありませんからね」

呉羽は今にも自分に飛びかかりそうな笠支配人を、片手を挙げて遮り止めた。笠支配人は誰も居ない部屋の中を見まわしながら不承不承に腰を落付けた。

「そ……その条件と仰言るのは……」

「こうよ。よく聞いて下さいね。いいこと……」

「ハイ。どんな難かしい条件でも……」

「そんなに難かしい条件じゃないのよ。ね。いいこと……たとい貴方あなたと妾わたしとが一所になつたとしても、この劇場の人氣が今までの通りじゃ仕様がなしでしょ。ね。正直のところそ  
うでしょ。轟家うちの財産だつて、もうイクラも残つてやしないし……貴方も相当に貯め込んでいらつしやるにしても遊びが烈しいからタカが知れてるわ」

笠支配人は忽ち真赤になった。モウモウと湯気を吹きそうな顔を平手でクルクルと撫で廻した。

「ヤツ。これあ……どうも……そこまで睨まれてちゃ……」

「ですからさあ……妾だつて全くの世間知らずじゃないんですから、好き好んで泥<sup>ぬかるみ</sup>濘<sup>み</sup>を撰<sup>よ</sup>つて寝ころびたくはないでしょ。ね。ですから云うのよ。モウ少し待つて頂戴つて……」

「もう少し待つてどうなるのです」

「あのね。妾もね……この劇場<sup>こや</sup>にも、探偵劇<sup>しぱい</sup>にも毛頭、未練なんかないんですけどね。折角、轟さんと一所に永年こうやつて闘つて来たんですから、せめての思い出に最後の一旗を上げてみたいと思つてんの……」

「ヘエ。最後の旗……」

「こうなんですの……きようは八月の四日、日曜日でしょう。ですから今日から来月の第一土曜、九月の七日の晩まで、丸つと一<sup>ひ</sup>と月お芝居を休まして、座附の人達の全部を妾に任せて頂きたいんですの。費用なんか一切あなたに御迷惑かけませんからね。妾はあの役<sup>ひ</sup>者達<sup>と</sup>を連れて、どこか誰にもわからない処へ行つて、妾が取つときの本読みをさせるの」

「貴女<sup>あなた</sup>が取つときの……」

「ええ。そうよ。これなら請合いの一生に一度という上脚本キリフダを一つ持っていますからね。

その本読みをしてスツカリ稽古を附けてから帰って来て、妾の引退興行と、呉服橋劇場独特の恐怖劇の最後の興行と、劇場主轟九蔵氏の追善と、大ガラムに宣伝して、涼しくなりかけの九月七日頃から打てるだけ打ち続けたら、キット相当な純益もが残ると思いますわ」

「さあ……どうでしょうかね」

「いいえ。きつと這入アタつてよ。それにその芝居キリフダの筋ネタというのが世界に類例のない事実曝露の探偵恐怖劇なんですから……」

「事実曝露……探偵恐怖劇……」

「そうなのよ。つまり妾の一生涯の秘密を曝露バラした筋なんですから……これを見たら今度の事件の犯人だって、たまらなくなつて、まだ誰も知らない深刻な事実を白状するに違いないと思われるくらいスゴイ筋なんですからね……自慢じゃありませんけど……ホホホ……」

彼女はスツカリ昂奮しているらしかった。白磁色の頬を火のように燃やし、黒曜石色こくようせきの瞳を異妖な情熱に輝やかしつつ、彼女の方からウネウネと身体からだを乗出して来たので、たまらない息苦しい眩惑をクラクラと感じた支配人は、今更のようにヘドモドし初めた。相

手の白熱的な芸術慾に焼き尽されまいとして太い溜息を何度も何度も重ねた。ハンカチで汗を拭き拭き慌て気味に問い返した。

「……ド……どんな筋書で……」

「それは……ホホホ……まだ貴方に話さない方がいいと思うわ。兎に角<sup>とかく</sup>一切貴方に御迷惑かけませんから貴方は今から九月の七日過ぎる迄、久振りに温泉か何かへ行つて生命<sup>いのち</sup>の洗濯をしていらつしやい。タツタ一箇月かソコラの間ですから、その間中貴方は絶対に妾の事を忘れていて下さらなくちや駄目ですよ。さもないと将来の御相談は一切お断りしますよ。よござんすか。仕事は一切私が自分でしますから……」

「出来ましようか貴女に……」

「一度ぐらいなら訳ありませんわ。小さな劇場<sup>こや</sup>ですもの……いつもの通りの手順に遣るだけの事よ。チョロマかされたつてタカが知れてますわ」

「資金<sup>おかね</sup>はありますか」

「十分に在つてよ。在り余るくらい……」

「意外ですなあ……どこに……」

「どこに在つてもいいじゃないの……とにかく貴方は今度だけ御客様よ。招待券の二三枚

ぐらい上げてもいいわ……ホホ……神戸の後家さん親娘おやこでも引っぱってらっしゃい」

「ジョ……冗談じゃない」

「そうよ。冗談じゃないのよ。真剣よ……妾……それまで処女を棄てたくないんですからね」

「シヨ……シヨジョ……」

「まあ何て顔をなさるの。妾が処女じゃないとでも仰言るの。ずいぶん失礼ね」

「イヤ。ケ……決してソナ訳では……」

「そんなら溫柔おとなしく妾の云う事をお聞きなさい。そうしてモウ時間ですからこの室を出て行つて頂戴……」

事件当夜……八月四日の呉服橋劇場は、非常な不入りであつた。その日の夕刊を見た人々は皆、当然の休場を予想していたらしく、毎日の定収入になっている御定連の入りすらも半分以下で、最終幕オオギリの前に「当劇場主轟九蔵氏急死に就き勝手ながら整理のため向う一箇月間休場いたします」の立看板を舞台中央の幕前に出した時には、無礼にも拍手した奴が居た。

「ああ。もうこの芝居も、これでおしまいか」と云って今更名残惜しげに表の絵看板を返る者さえ居た。

その時にスター女優天川呉羽は、劇作家、江馬兆策と一所に銀座裏のアルプスという山小舎式の珈琲店の二階で、向い合っていた。白づくめの洋装をした呉羽は中世紀の女王のようにツンとして……。タキシードの兆策はその従僕のように、巨大な木の切株の中に置いて竹製の腰掛にかかっている。帳場の煤けたラムプを模した電燈の蔭に、向うむきに坐った見すばらしい鳥打帽の男がチビリチビリとストローを舐っているほかには誰も居ない。部屋の中をチラリと見まわした呉羽は、切株のテーブルの上に肘を突いて兆策の耳に顔を近付けた。兆策も熱心にモジャモジャの頭を傾けた。低い声が部屋中にシンシンと途切れ散る。

「江馬さん。よござんすか。これは妾の一生の秘密よ。今度、轟さんが殺された原因がスツカリわかる話よ」

「えッ。そ……そんな秘密が……まだあるんですか」

「ええ。トテモ大変な秘密なのよ。今月の十五日迄にこの秘密をアンタに脚色してもらって、来月の初め頃にかけて妾自身が主演してみたいと思っているんですから、そのつもり

で聞いて頂戴よ」

「……かしこ……まりました」

「ですけどね。この話の内容は、芝居にすると相当物騒なんですから、警視庁へ出すのは筋の通る限り骨抜きにした上演脚本あげほんを書いて下さらなくちゃ駄目よ。興行差止チリンチリンなんかになつたら、大損をするばかりじゃない。妾の計劃がメチャメチャになつてしまふんですからね。是非ともパスするように書いて頂戴よ。もちろん日本の事にしちゃいけないの。西洋物のやきな翻案とか何とかいう事にして、鹿爪しかづめらしい原作者の名前か何か付けて江馬兆策脚色とか何とかしとけばいいでしょ。その辺の呼吸は万事おまかせしますわ」

「……しうち……しました」

「出来たら直ぐにウチの顧問弁護士の桜間さんに渡して頂戴……」

「支配人じゃいけないんですか」

「ええ。妾の云う通りにして頂戴……笠さんじゃいけない訳は今わかりますから……」

「……で……そのお話というのは……」

「……もう古い事ですわ。明治二十年頃のお話ですからね。畿内の小さな大名植村駿河するがの守かみという十五万石ばかりの殿様の御家老の家柄で、甘木丹後あまきたんごという人の末ツ子に甘木柳りゅう

仙<sup>うせん</sup> という画伯<sup>えかき</sup>さんがありました」

「どこかで聞いた事があるようですな」

「ある筈よ。ホホ。柳<sup>りゅうせん</sup> 遷<sup>りゅうせん</sup>とか柳<sup>りゅうせん</sup> 川<sup>サイン</sup>とか色々署名<sup>サイン</sup>していたようですが、その人が御

維新後のその頃になって、スツカリ喰い詰めてしまつて、東海道は見付<sup>みつけ</sup>の宿<sup>しゆく</sup>の等々力<sup>とどりき</sup>雷九郎という親分を頼つて来て、町外れの閑静な処に一軒<sup>うち</sup>、家を建ててもらつて隠棲しておりました。静岡、東京、名古屋、京阪地方にまでも絵を売りに行つて相当有名になっておりましたが、その中でも古い錦絵の秘密画とか、無残絵とか、アブナ絵とかを複写するのが上手で、大正の八九年頃には相当のお金を貯めて、小さいながら数奇<sup>すき</sup>を凝らした屋敷に住むようになっていたそうです」

「それで思い出しました。僕はその絵を見た事があります。たしか四条派だつたと思いますが……」

「ね。あるでしょう……その柳仙夫婦の間に、その頃三つか四つになる三枝という女の児<sup>こ</sup>がありました。父親が五十幾つかの老年になって出来た子供なのでトテモ可愛がつて、ソラ虫封じ、ソラ御開運様といった風に色々な迷信<sup>うち</sup>の中に埋めるようにして育てたものだそうです。それがアンマリ利き過ぎたのでしよう。今の妾<sup>めかけ</sup>みたいな人間になつてしまつた

のです」

「結構じゃないですか」

「……まあ聞いて頂戴……その大正の十年ごろ静岡あたりを中心にして東海道から信州へかけて荒しまわっていた殺人強盗で、本名を石栗虎太、又の名を生せいばん蕃小僧というのが居りました。生蕃みたいに山の中へ逃込むとソレツキリ捕まらない。人を殺すことを何とも思っていないところから、そう呼ばれていたのだそうです。その生蕃小僧がこの柳仙の一軒屋に眼を付けたのですね。……どうしてもモノにしようと思つて色々様子を探つてみたんだそうですが、その柳仙の一軒屋というのは、見付の人家から二三町も離れていて、呼んでも聞こえないばかりでなく、四方八方に森や、木立や、小径がつながり合つていて、盗賊には持つて来いの処だったのですが、しかし、何よりもタツタ一つ、一番恐ろしい番犬がこの柳仙の家をガツチリと護衛まもつている事が、最初から判明わかつていたのでした。……その番犬というのは見付の町で、土木の請負をやっている等々力親分の一家でした。

その頃見付の宿で、等々力雷九郎親分の後を嗣ついでいたのが等々力久蔵という、生蕃小僧と同じ位の年頃の若い親分でした。もつとも大正十年頃の事ですから、昔ほどの勢力はなかったのでしょう。そこいらの田舎銀行や、大百姓の用心棒ぐらいの仕事しかなかった

のでしょう。その上に、その若親分の久蔵というのも、昔とは違った帝大出の法学士で、弁護士の免状まで持っていたインテリだったようですが、乾分こぶんに押立てられてイヤイヤながら渡世人の座布団に坐り、新婚早々の若い、美しい奥さんと二人で、街道筋を見渡していたのですが、この若親分の久蔵というのが、十手捕縄を預っていた雷九郎親分の血を引いたものでしょう。親分生活は嫌いながらにあの辺切つての睨み上手の、捕物上手で、云つてみれば田舎のシャロック・ホルムズといったような名探偵肌の人だったのでしょうか。すこし手口の込んだ泥棒でも這入ると、警察より先に久蔵親分の処へ知らせて来るということです。流れ渡りの泥棒なんぞは、みんな等々力親分の縄張りを避けて通った。ウツカリ久蔵親分の眼の届く処で仁義の通らぬ仕事なんかすると、警察よりも先に手を廻されて半殺しの目に会わされるという評判で、生蕃小僧にとっては、この久蔵親分の眼がイの一番に怖くて怖くてたまらなかつたのだそうです。

そこで生蕃小僧は意地になつてしまつて、どうしてもこの等々力巡查をノックアウトしてやろうと思つて色々と智恵を絞つたのでしょうか。とうとう一つのスゴイ手を考え付いたのです……ちよつと生蕃小僧という名前だけ聞くと人相の悪い、恐ろしい人間に思えるようですが、それは刃物ドスが利くのと、脚力ノビが利くところを云つたもので、実は普通のひととち

ツトモ変らない男ぶりのいい虫も殺さない恰好で、おまけに腰が低くて愛嬌がよかったもんですから行商人なんかになるとマルキリ本物に見えたそうです。ですから生蕃小僧はそこを利用してその頃流行<sup>はや</sup>つていた日本一薬館<sup>オツチニ</sup>の家庭薬売に化けて大きな風琴を弾き弾き見付の町を流しまわっているうちに、等々力の若親分の身のまわりをスツカリ探り出してしまいました。

……何でも等々力若親分の若い奥さんというのは、近くの村の百姓の娘で、持って生れた<sup>きりようよ</sup>縹緞<sup>でんぼうはだ</sup>美<sup>じ</sup>しと伝法<sup>でんぽう</sup>肌<sup>はだ</sup>から、矢鱈<sup>やたら</sup>に身を持崩していたのを、持て余した親御さんと世話人が、情<sup>じょう</sup>を明かして等々力の若親分に世話を頼んだものだそうですが、何ぼ等々力の親分のお声がかりでも、こればかりは貰い手がないので、何となく顔が立たないみたいな事になつて来たものだそうです。そこで……ヨシキタ……そんなら一番俺がコナシ付けてくれよう。俺の傍<sup>そば</sup>へ引付けておいたら、そう無暗<sup>むやみ</sup>に悪あがきも出来ないだろうというので、乾児<sup>こぶん</sup>たちの反対を押切つて、立派な婚礼の式を挙げたものだそうですが、これが等々力親分の一生の身の過<sup>あやま</sup>りでした。というのは、その若い奥さんの伝法肌<sup>でんぽう</sup>というのが、若い女チヨツトした虚栄心が生んだ浅智恵から来たものだつたのでしょうか。若親分から惚れられているなと思うと、早速亭主を馬鹿にしちやつて、主人の留守中に、何かしら近所の噂に

かかるような事をしていたのでしよう。ですから、そんな事を聞き出した生蕃小僧はスツカリ喜んじやったのですね。大胆にもオツチ二の金モール服のまま、他所よそから帰つて来る若親分を、町外れの草原くさはらで捕まえて面会したのだそうです。そうして奥さんの不行跡ふしだらを自分一人が知っている事のように洗い泄ざらい並立てて脅迫しながら、済まないがこここのころを暫くの間、眼をつむつてもらえまいか。稼ぎ高を山分けに致しますから……とか何とか厚顔あつかましい事を云つて、柔らかく固く相談をしますと、不思議にも若親分が、青い顔をして暫く考えた後にのち、黙つて承知したんだそうです。モトモト久蔵親分は、好きで渡世人になつた訳じゃないし、法律の一つも心得ているだけに、東京へ出て一旗上げたい上げたいと思ひながら、因縁に引かれ引かれて足を洗いかねているところへ、最愛の女おかみさん房ふから踏み付けにされちやったのですからスツカリ氣を腐らしたのでしよう。そうして生蕃小僧に別れると直ぐに久蔵親分は、甘木柳仙の処を尋ねて、すみませんがモウお雛様がお片付きのようですから、御宅のお嬢さんを又、暫く私に貸して頂けますまいか。久し振りに抱だつこして寝たいですからと申込みました……久蔵親分は若い人に似合わない子供好きで、見付の子供は皆オジサンオジサンと云つて懐なついていたそうです。わけてもこの柳仙の処の子供は、特別に可愛がつていたせいでしよう。まるで親のように懐なついておりましたし、

それまでも度々そんな事がありましたので、柳仙夫婦は快く子供の着物を着かえさしたりお菓子や寢床まで風呂敷に包んで、若親分に渡してやったそうです。

……それから若親分は自宅へ帰ると、直ぐに乾児こぶんどもを呼集め、その大勢の眼の前に、若い奥さんと世話人を呼付けてアツサリ離別を申渡しましたので、二人ともグーの音ねも出ないで荷物を片付けてスゴスゴと田舎へ帰りました。それを見送った若親分は……ほんとに済まない事をした。俺の顔ばかりでなくお前たちの顔まで潰してしまった。俺はモウ決心を固めているのだからこの際何も云うてくれるなと云って乾児こぶんの中の一人に自分の席を譲り、その場で、お別れの酒宴を初めました。

……一方に柳仙夫婦の一軒屋へ生蕃小僧が忍び入って、夫婦と女中の三人を惨殺し、家うち中ちゆうを引掻きまわして逃げて行つたのは、ちょうどその曉あけがた方の事だったそうです。ところで生憎あいにくか仕合わせかわかりませんが、その時に柳仙の手許に在ったお金はお小遣の余りの極く少しで、銀行の通帳や貴重品なんかは見付の町に在った心安い貯蓄銀行の金庫に預けてありましたので、お金以外の品物を決して盗らない事になっている生蕃小僧にとつてはトテも損な稼ぎだったのでしょう。ところが、それとはウラハラに久蔵若親分はステキに、うまい事をしてしまいました。多分柳仙の家うちに残っていた印形いんぎようを利用するか何

かしたのでしょう。それにしてもドンな風に胡麻化ごまかしたもののか知りませんが、当然、その娘のものになる筈の何万かの財産と、かなり大きな生命保険を受取ると、そのまま行衛ゆくえを晦くましてしまったものだそうです。

……ね……もうおわかりになったでしょう。柳仙夫婦がこの世に残したものの中でも一番大きい、美味おいしいことは、みんな久蔵若親分のものになってしまったのですからね……あとからこの事を知った生蕃小僧が、それこそ地団太を踏んで今の轟九蔵を怨んだのは無理ありませんわね。ですから轟がドンナに巧妙に姿を晦くまして生蕃小僧はキツト発見みつ出して脅迫して来るのでした。俺が捕まったらキツト貴様も抱込んで見せるとか、当り前の復讐では承知しないぞ……とか何とか云っていたそうですが、しかし轟はセセラ笑っておりました。彼奴きやつの怨みは藪きやつ睨みの怨みだ。俺は別に生蕃小僧をペテンにかけるつもりじやなかったんだ。ただお前が可愛くてたまらなかったばかりに、万一の事が気にかかってアンナ事をしただけの話なんだ。もちろん生蕃小僧がアンナに早く仕事にかかろうとは思わなかったし、奥さんの事を片付けてサツパリしてから柳仙に注意しようし、手配もするつもりでいたんだから、柳仙夫婦が、あのまんま無残絵になってしまったのはヤハリ天命というものだだろう。

……柳仙が国禁の絵を描いている事はトツクの昔から睨んでいた。しかしイクラ忠告をしても止めないばかりでなく、県内の有力者の勢力なんかを利用して盛んに高価<sup>たか</sup>い絵を売り拡げて行くので、俺は実をいうとホントウに柳仙の厚顔<sup>あつかまし</sup>さを憎んでいた。ナンノ柳仙を見付から追出すくらい何でもなかったんだが、ただお前の可愛さにカマケていたばかりなんだ。それから先の事は自然<sup>なりゆき</sup>の成行で、大和の国に居る柳仙の親類なんかは一人も寄付がなかったんだから仕方がない。生蕃小僧から怨まれる筋合いなんか一つもないばかりでなく、俺はお前を無事に育て上げるために、生命<sup>いのち</sup>がけで闘わなければならぬ身の上になつてしまった。俺が朝鮮に隠れてピストルの稽古をして来た事を、生蕃小僧が知っていなかったら、俺もお前もトツクの昔に生蕃小僧にヤツツケられていたろう。

……ところが、それから後<sup>のち</sup>、四五年経つと流石<sup>さすが</sup>の生蕃小僧も諦<sup>あいつ</sup>らめたと見えて、バツタリ脅迫状を寄越さなくなった。彼奴<sup>あいつ</sup>から脅迫状が来るたんびに俺はすこしずつ金を送つてやる事にしていたんだから不思議な事と思つたが、もしかすると自分の怨みが藪<sup>くさ</sup>睨みだつたのに気付いたのかも知れない。それとも病気で死ぬかどうかしたのじやないかと思うと、俺は急に気楽になつて本当の活躍を初め、今の地位を築き上げたものなんだが、その十幾年後の今日<sup>こんにち</sup>になつて突然に又生蕃小僧から脅迫状が来はじめたのだ。しかも俺にとって

は実に致命的な意味を含んだ脅迫状が……」

「エツ……チヨチヨチヨット待つて下さい」

江馬兆策は感動のあまり真白になった唇を震わした。

「そ……それもホントなんですか」

「ホホホ……みんな真<sup>ほんとう</sup>実なのよ。最初から……まだまだ恐ろしい事が出て来るのよ。これから……」

「……………」

「シツカリして聞いて頂戴よ。是非とも貴方に脚色して頂いて、大当りを取って頂きたいつもりで話しているんですからね」

「……………」

「……その脅迫状というのは、最初は極く簡単なものだったのです。一週間ばかり前に来たのは普通の封緘葉書で金釘流で『大正十年三月七日を忘れるな……芝居じゃないぞ』とたっただけのものだったのですが、それから後に二三回引続いて来たものは、相当長い文句のチャンとした書体で、とてもとても恐ろしい……私達の致命傷と云ってもいい文句でしたわ」

「…………ど…………ドンナ……」

「ホホホ。アンタ気が弱いだね。そんなに紙みたいな色にならなくなっただっていいわ。あのオ……チョイト……ボーイさん。ウイスキー・ソーダを一つ……大至急……」

江馬兆策はホツと溜息をした。顔中に流るる青白い汗をハンカチで拭いた。

「ホホホ。落付いてお聞きなさいよ。モウ怖いことなんかないんですからね。犯人が捕ま  
つて片付いちやったアトなんですから……」

「でも……でも……まだ疑問の余地が……」

「ええええ。まだまだ沢山に在るのよ。モットモット大きな、深い疑問が残っているのを  
誰も気付かずにいるのよ。轟さんの心臓にあのナイフが突刺さったホントの理由が、わか  
る話よ」

「エエツ。それじゃホントの犯人が……別に……」

「居るか居ないかは貴方のお考えに任せるわ。そこがこの脚本のヤマになるところよ。い  
い事……その長い脅迫状の文句はこうなのです。その脅迫状はあたし自分の部屋の鏡台の  
秘密の曳出<sup>ひきだし</sup>にチャント仕舞っているのですから、あとからお眼にかければわかるわ……  
轟九蔵と甘木三枝は、戸籍面で見ると親子関係になっていない。女優の天川呉羽は轟九蔵

の養女でも何でもないのだから、つまるところ轟九蔵は甘木三枝の財産を横領している事になる。それのみか、轟九蔵と天川呉羽とは事実上の夫婦関係になっている事を、俺は最近になって探り出しているのだ。その上にその呉羽こと三枝という女は、ズット以前から劇作家江馬兆策と関係している……」

「ワツ……ト飛んでもない……アツツ……」

江馬兆策は突然真赤になつて手を振つたトタンに、たつた今来たウイスキー・ソーダの飲みさしを切株のテーブルの上に引っくり返した。それを給仕が急いで拭こうとしたナプキンを慌てた兆策が引つたくつて拭いた。

「ホホホ。馬鹿ねえ貴方は……わかり切っている事を妾の前で打消さなくたつていいじゃないの……ホホ……」

兆策はモウすっかり混乱してしまつたらしい。濡れたナプキンで上氣した自分の顔を拭き拭き給仕にソーダのお代りを命じた。しかし給仕は笑わないで、腰を低くして、恭しくナプキンを貰つて行つた。

「……ね。ですから妾あなたに考えて頂こうと思つてお話するのよ。貴方はいつもソナ問題ばかりを研究していらつしやるんですから、妾の話をお聞きになつたらキット犯人を

直覺して下さいと思うのよ。轟九蔵を殺したのは生蕃小僧じゃない。あの支配人の笠圭之介……」

「エッ……ナ何ですって……そんな事が……」

江馬兆策が中腰になった。しかし呉羽は冷然と落付いていた。

「あたし……それが今日わかったのよ。あの笠圭之介がね。ツイ今さっきの夕方の幕間に妾をあゝの五階の息つき場へ呼んでね。よもや誰も知るまいと思っていた脅迫状の中味とおんなじ事を云って妾を脅迫したのよ。轟さんと妾の関係や貴方と妾の関係を疑ったような事を云ってね……ですから妾ヤツト気が付いたのよ、今捕まっているのはホンモノの生蕃小僧じゃない。ドツサリお金を掴ませられているイカサマの生蕃小僧で、公判になったらキツト供述を引つくり返すに違いない。だから本物の生蕃小僧はアノ支配人の笠圭之介……」

「フ——ム——」

江馬兆策が頭を抱えて椅子の中に沈み込んだ。眼をシツカリと閉じて、モジャモジャした頭の毛の中へ十本の爪をギリギリ喰い込ませた。

「……ね……こんな事があるのですよ。今もお話した通り、生蕃小僧の脅迫状が来なくな

つてから轟がホントウに活躍を初めたのが大正十四年頃でしょう。それからあの呉服橋劇場を買ったのが昭和三年の秋ですから、その間に三四年の開きがあるわけでしょう。その間に生蕃小僧が悪い仕事をフツツリと止めて、あの呉服橋劇場の支配人になり済ますくらの余裕はチャントあるでしょう。生蕃小僧があんなにムクムクと肥って、丸きり間違えてしまっている事も、考えられない事じゃないでしょう。そこで生蕃小僧は上手に轟さんに入るか、又は影武者の生蕃小僧に脅迫状を出させるか何かしてあの劇場こやを買わせたのよ。そうしてあの劇場の経営を次第次第に困難に陥れて、轟さんの爪を剥いだり、骨を削ったりしながら待っている中に、妾が年頃になったのを見澄まして轟さんを片付けて、タツタ一人になった妾を脅迫して自分のものにしようと巧たくらんだ……と考えて来ると、芝居としても、実際としても筋がよく透るでしょう。何の事はない新式の巖窟王よ……ね……」

「……………」

「その中でタツタ一つ邪魔じゃまつけ気なのは貴方です。江馬さんです……ね。貴方は天才的な探偵作家ですから普通の人だったら夢にも想像出来ない事をフンダンに考えまわしておられる方です。ですから万一、今のようなお話をお聞きになった暁には、いつドンナ処から自分の正体を看破みやぶられるかわからない。警戒の仕様がなしでしょう」

「……………」

江馬兆策は頭の毛を掴んだままソツと両眼を見開いた。その両眼は重大な決心に満ち満ちた青白い、物凄い眼であつた。わななく指をソロソロと頭から離して、そこいらを見まわすと、ウイスキー曹達<sup>ソーダ</sup>に濡れた切株の端に両手を突いて立上つた。呉羽の希臘<sup>ギリシャ</sup>型の鼻の頭をピツタリと凝視して徐ろ<sup>おもむ</sup>に唇を動かしした。

「……貴女は名探偵です……」

呉羽も調子を合わせるようにヒツソリとうなずいた。大きな眼をパチパチさせた。

「……ですから……貴方をお願いするのです。今から笠支配人の様子を探して下さい。そうしてイヨイヨ生蕃小僧の本人に違いないという事がわかったら……」

「……コ……殺してしまいます」

江馬兆策の両眼が義眼<sup>いれめ</sup>のように物凄くギラギラと光つた。

「イケマセン」

呉羽は真剣に手を振つた。

「……ナ……ナゼ……何故ですか」

「復讐の手段は妾に任せて下さい。両親の仇<sup>かたき</sup>……轟の仇です……」

「……………」

「それでね貴方にその脅迫状の束を全部さし上げます。それをイヨイヨとなったら笠に突付けて云つて御覧なさい。お前はお前の書いた文句を忘れてやしまい。呉羽さんを脅迫した言葉も忘れてやしないだろうって……ね……」

「……………」

「それからね。貴方の活躍の期限を来月の十日までに切っておきます。来月の十日になつても笠に泥を吐かせる事が出来なかつたら一先ず帰っていらつしやい。よござんすか。費用は脅迫状の束と一緒に、明日の午後にあすに差上げます」

「イヤ。費用なんか一文も要りません」

「いいえ。いけません。他人の間は他人のようにしとくもんです」

「エッ……他人……」

「ええ。そう。今じゃ全くの赤の他人でしょう。ですからそのつもりでいらつしやい。それからの御相談は、何もかも来月の十日過すぎにお願いしますわ」

ハッと感激に打たれた江馬は深海魚のように眼を丸くして呉羽の顔を凝視した。口をアングリと開けて棒立ちになつていたが、やがてクシヤクシヤ頭をガツクリとうなだれると、

涙をポトポトと落しながら口籠もった。

「かしこ……まりました」

そうして、なおも感激に堪え切れないらしく、兵隊のようにクルリと身を翻すと、非常な勢いでホールを出て行つた。百雷の落ちるような凄じい音を立てて階段を駆け降りて行つた。

「……ホホ……確証を掴んだシャロック・ホルムズ……義憤に駆られたアルサーヌ・ルパン、ホホホホハハハハ……」

星だらけの空を真黒く区切つた檜の木立の中に燈ともしび火を消した轟家は人が居るか居ないか、わからない位ヒツソリとしている。表門に貼付けた「不幸中に付家人一切面会謝絶」と書いた白紙が在るか無いかの風にヒラヒラと動いているきりである。

これに反してお庭の隅きづたの常春藤に蔽われたバンガロー風の小舎には燈ともしび火がアカアカと灯ともつて、しきりに人影が動いている。

非常な勢いで帰つて来た江馬兆策が、妹の出したお茶も飲まない無言のまま、ガタンピシンと戸棚を引開けて、あらん限りの服、帽子、靴、ズボン吊、トランクを引ずり出して

旅支度を初めたのを、妹の美鳥<sup>みどり</sup>がしきりに心配して止めているのであった。

「まあ……お兄様ったら……気でもお違いになったの……」

「感謝<sup>コオマブソ</sup> 感謝<sup>コオマブソ</sup>。心配しなくなつていいんだ。気も何も違つてやしない」

「だってイツモのお兄様と眼の色が違うんですもの……まるで確証を握ったシヤロック・ホルムズか義憤に猛り立つアルセエヌ・ルパンみたいよ。ホホホ。どうなすつたの……一体」

「黙つて見てろつたら。非常な重大事件だから……お前が関係しちやイケナイ問題なんだから絶対に局外中立の態度で、黙つて見てなくちやイケナイ重大事件なんだからね」

「わかつてよ。それ位の事……轟<sup>うち</sup>さんのお家の事でしよう」

「そうなんだよ。ホントの犯人がわかりそうなんだよ。そいつを僕が突止める役廻りになつたんだよ」

「だからウイスキー<sup>ソーダ</sup>曹達<sup>ソーダ</sup>を、お引っくり返しになつたの……」

「ゲツ……お前見てたのかい」

「ホホホホ。ビックリなすつたでしょ」

兆策は自然木の椅子にドツカと尻餅を突いた。氣抜けしたように溜息をして取散らした

室内を見まわすと、醜い顔に不釣合な大きな眼をパチパチさせた。

「……………どうして聞いたんだい。タツタ今帰って来たばかりなのに……………」

美鳥は淋しく笑いながら向い合った椅子に腰を降ろした。

「何でもないことよ。妾だつて今度の轟さんの事件ではずいぶん頭を使っているんですもの。ホントの犯人が誰だか色々考えているうちに、万一貴方が疑われるような事になったらドウしようと思つて一生懸命に考えまわしていたのよ」

「フーン。どうして二人に嫌疑がかかるんだい」

「お兄さん御存じないの。昨夜十二時頃、轟さんと呉羽さんとが、支配人の眼の前で大喧嘩をなすつた事を……………」

「知らなかったよ。俺はその頃お前と二人で、ここで茶を飲んでいたんだから」

「ええ。そうよ。ですから妾も知らなかったんですけどね。小間使のイチ子さんが今朝になつて、その事をおヨネさんに話したんですつて……………そうしたらおヨネさんがビックリしちゃつてね。その喧嘩の話は決して喋舌しゃべりつちやイケナイつて云つてねあの女ひと、自分がオセツカイのお喋舌しゃべりのものですから、イチ子さんにシツカリと口止めをしといてから、わざわざ来てソツと私に知らしてくれたのよ。こちらでも氣けぶりにも出さないようにして

下さいってね。おかアしな女<sup>ひと</sup>よ。おヨネさんたら……ホホホ。あたし最初、何の事だかわかんなかったわ」

「ああ。その話かい。今朝<sup>けさ</sup>、台所で暫くボソボソやっていたのは……一体何の喧嘩だい。轟さんと呉羽さんと言い争った原因というのは……」

「妾たち二人を追い出すとか出さないとかいう話よ」

「ナニ……俺たちを追い出す……？……」

「ええ。そうなんですって。何故だかわかんないんですけど」

「……ケ……怪<sup>け</sup>しからん。俺は今までの轟をずいぶん助けてやっているのに……」

「……そんな事云ったって駄目よ。御恩比べなんかすると馬鹿になつてよ」

「馬鹿は最初から承知しているんだ。向うはホンの些<sup>ちっ</sup>ばかりの金を出してくれただけだ。それに対してこちらは、お金で買えない天才を提供しているじゃないか。しかも有らん限りの生命<sup>いのち</sup>がけで……」

「お兄さん馬鹿ね。そんな事云ったって誰も相手にしやしませんよ」

「一体ドツチが俺たちを追い出すと云うんだ」

「轟さんが追い出すって云うのを呉羽さんが、理由なしにソナ事をしてはいけないうって

ね。泣いて止めていらつしたそうよ」

「当り前だあ」

「当り前だかドウだか知りませんけどね。もしソナ話があつたのを妾たちが聞いたつて事が警察にわかつたら大変じゃないの。お兄さんの極端に激昂し易い性格は、みんな知っている事だし、あの家の案内は残らず御存じだし……万一、疑いがかかつたら大変と思つてね妾ずいぶん心配したのよ」

「馬鹿な……俺はソナ馬鹿じゃない」

「だつて今みたいに昂奮なさるじやないの……話がわかりもしない中に……」

「……ウウン……それあ……そうだけど……」

「……ね……ですから妾は直ぐにアライの説明の仕方や何かについて考えたわ。……ずいぶん苦心したことよ」

「そんな事は苦勞する迄もないじやないか。昨夜はチャントここに寝てたんだから……」

「まあ。そんなアライが成立する位なら苦心しやしないわ。お兄さんたら探偵作家に似合わない単純な事を仰言るのね。でもその寝ていらつしやるところを誰か他所の人が夜通し寝ないで見ていなくちや駄目じやありませんか。妹の妾が証明したんじや証明にならな

いんですからね。それ位の事は御存じでしょう。貴方だって……」

「ウム。そんならドンナアバイを考えたんだい」

「それがなかなか考えられないのよ。ですからね。今夜、貴方がお帰りになったら、よく相談しましょうと思って待っていたら、イツモの十一時になってもお帰りにならないですよ。劇場の方へ電話をかけてみたら、もうお芝居はトックにハネちゃって、呉羽さんと二人でお帰りになったって云うでしょう。ですからテツキりあのアルプスに違いないと思って電話をかけたらテツキりなんでしょう。ですからその電話に出たボーイさんに頼んであすこの受話機を……ちようど貴方の背後に在る木の空洞の中の卓上電話を外しつ放しにして受話機を貴方の方に向けておいてもらったのよ。ですから貴方と呉羽さんのお話は何もかも筒抜けに聞えたのよ。あの家はいつもシーンとしているんですからね」

「エライツ。名探偵ツ……握手して下さいッ」

「馬鹿ね。お兄さま……あの女の云う事、信用していらっしやるの……」

「あの女ひとって誰だい」

「誰あの人って彼女以外に誰も居なかったじゃないの……」

「呉羽さんが僕と結婚してもいいって話かい」

「ええ。あれは絶対に信用なすつちや駄目よ」

「エッ……どうして……」

「どうしてつたつて呉羽さんは、お兄さんと結婚してもいいって事をハッキリ仰言りやしなかつたわ」

「……………」

兆策は額を押えて椅子に沈み込んだ。

「フ——ム。そうかなあ……」

「そうよ。彼女の<sup>あのひと</sup>話は陰影がトテモ深いんですから、用心して聞かなくちや駄目よ。たといソナ事をハッキリ仰言つたにしても、それあ嘘よ……キット……」

「どうしてわかるんだい。そんな事が……お前に……」

「女の直観よ。……第三者の眼よ……」

「それだけかい……」

「それだけでも十分じゃないの。あたし……あの呉羽<sup>ひと</sup>つて女……キット深刻な変態心理の持主だと思うわ」

「直感でかい」

「いいえ。色んな事からそう思えるのよ。第一あの女は貴方がホントに好きなんじゃない。妾が好きなのよ……それも死ぬほど……」

「ナ何だつて……真実かいそれあ……」

兆策は飛上らんばかりにして坐り直した。

「シツ。大きな声を出しちや嫌よ。外に聞こえるから……ホントなのよ。間違いないのよ。あの女は、妾と近しくなりたいために、お兄さんと心安くしていらつしやるのよ。あの女がお兄さんを見送っている眼と唇に氣をつけていると、トテモ他所他所しい冷めたさを含んでいるのよ。お兄さまを冷笑しているとした思えない事さえあるわ。あたし何度も何度も見たわ」

兆策は血の氣の失せかけた頬と額を、新しいハンカチでゴシゴシと力強く拭いた。

「フーム。それじゃ、お前を好いている事は、どうしてわかったんだい」

「あたし、お兄さんの前ですけどね。あの女がこの頃、怖くて仕様がないのよ。……あの女はね。妾を好いていると云った位じゃ足りないで、心の底から崇拜しているらしいのよ。トテモおかしいのよ。妾がズット前にあの女の部屋に忘れて行った黄色いハンカチを大切に仕舞つておいて、何度も何度も接吻してんのよ。妾が偶然に行き合わせた時に、周章て

て隠しちゃったんですけど、そのハンカチにあの人の口紅のアトが残ってベタベタ附いているのが見えたわ」

「ウフツ。気色の悪い……ホントかいそれあ」

「お兄さんに嘘を吐いたって仕様がなないじゃないの。いつでもあの女の妾ひとを見ている眼の視線は、妾の横頬にジリジリと焦げ付くくらい深刻なのよ」

「ヘエツ。驚いたね。それじゃ……つまり同性愛だね」

「そんなものらしいのよ。持つて生まれた性格を舞台の上でイタメ附けられている荒んだ性格の人に多いんですってね。呉羽さんなんか尚なおさらそれが烈しいのでしょう。ですから妾……お兄さんの事さえなければこの家を逃出うちそうと思つた事が何度も何度もあるくらい氣味が悪かつたんですけどね……ロッキ・レコード会社から専属になつてはドウかつてね、或る親切な人から何度も何度も云つて来ているんですけど、断つちやつてジイツと我慢し通してんのよ」

「馬鹿……何だつて断るんだ。そんな美味い口を……」

「だつて妾が二百円取つてお兄様を養うよりも、妾がお兄さまの百円の御厄介になつていの方が嬉しいんですもの……」

「うむ。そうかッ……感謝するよ……」

兆策はモウ眼を真赤にしていた。

「でも……トテモ息苦しいのよ。だって同性愛なんて日本にだけしかない事でしょう。朝お鮮くではソナ話、聞いたこともないんですから、ドウしたらいいのかわかんないんですもの。呉羽さんと同じ位に妾が呉羽さんを好きにならない限り、どうする事も出来ないじゃないの。女蛇に魅入られたようなタマラナイ氣持になるだけよ。それがトテモ底強い魅力を持つて迫つて来るんですから尚な更おさら、息苦しくなつて来るのよ」

「手紙も何も来ないのかい呉羽さんから……」

「イイエ。そんなもの一度も来たことないわ。妾が現実になんて感じて居るだけなの」

「フ——ム。そうすると……どうなるんだい……ボ……僕は……」

「アラ泣いていらつしやるの……お兄様は……」

「泣いてやしないよ。怖いんだよ。僕は……」

「チツトモ怖いことないわ。お兄様はただあの女ひとに欺ひかれていらつしやればいいのだわ。あの女ひとは、まだ轟さんを殺した犯人について疑つていらつしやるのでしょうか……ね……そうですね。ですから貴方に頼んで探してもらおうと思つていらつしやるんですから、そ

の通りにしてお上げになったらいいでしょう」

「何だか訳がわからなくなっちゃった。つまり僕はあの女の云うなりになっていればいいんだね」

「ええ。そうよ。こつちがあの女を疑っているソブリなんかチツトも見せないようにしてね。そうしていらつしやる中にはヒヨツトしたらあの女だって、お兄様をお好きにならないとも限らないわ」

「タヨリないなあ。お前の云う事は……モツト確<sup>しつ</sup>りした事を云つとくれよ」

「だって将来<sup>さき</sup>の事なんかわかんないんですもの……貴方みたいに正直に、何もかも真<sup>ま</sup>に受けて、青くなったり、赤くなったり……」

「オイオイオイ。電話で顔色がわかるかい」

「アラッ。バレちゃったのね。トリックが……」

「トリック。何だいトリックって……」

「ホホホ。何でもないのよ。あたし今夜あなたのアトから直ぐに家<sup>うち</sup>を閉めて出かけたのよ。だってコンナ時にはトテモたった一人でお留守番なんか出来ないんですもの。家<sup>うち</sup>の中には貴方の原稿以外に貴重品なんか一つも無いでしょう。……それからね。序<sup>ついで</sup>に途中で寄道を

してロッキ・レコードへ寄って契約して来ちゃったわ。一ヶ月二百円で……」

「ゲエツ。ほんとかい……それあ……」

「ええ。だって轟さんが死んじやったら妾たちだって相当の覚悟をしなくちゃならないんでしよう。契約書見せましょうか……ホラ……」

「ウウムム。ビックリさせるじゃないかヤタラに……」

「世話してくれた人トテモ喜んでたわ。妾の声は西洋人がヤタラに賞めるんですってさあ。この間テストした時に……ですからモウ誰の世話にならなくとも大丈夫よ。轟さんから受けた御恩を呉羽さんにお返しするだけよ」

「お前はたしかに俺より偉いよ。今夜という今夜こそ完全にまいった」

「ホホホ。まだエライとこ在るのよ」

「ナナ何だい一体……」

「当てて御覧なさい」

「わからないね」

「さっきの電話の話ウソよ」

「ヘエツ。何だって……」

「アラッ。まだわかつていらつしやらないのね」

「だって、まだ何も聞きやしないじゃないか、トリックの事……」

「自<sup>じ</sup>烈<sup>れつ</sup>度<sup>た</sup>いお兄さんたらないわ。あのね……あたし今夜貰った契約の前金で変装して今夜のお芝居見に行つたのよ。そうして貴方と呉羽さんのアトを跟<sup>つ</sup>けてアルプスへ行つて、お二人の話を横からスツカリ聞いてたの……鳥打帽を冠<sup>か</sup>つて色眼鏡をかけて、レインコートの襟を立てて煤<sup>すす</sup>けたラムプの下にいたから、わからなかった筈よ。あすこのマダムはやっぱり朝鮮<sup>おくに</sup>の人で、ズツ前から心安いのよ。ロッキ・レコードの支配人の第二号なんですからね。今度の話もあのマダムが世話してくれたのよ」

「驚いた……驚いた……驚いた……」

「まだビックリなさる事があつてよ。あの笠<sup>かさ</sup>つていうお爺さんね」

「可哀<sup>ひど</sup>そうに、お爺さんは非道いよ」

「あの笠<sup>かさ</sup>圭之介<sup>けいすけ</sup>つて人を貴方はホントの犯人と思つていらつしやる？」

「さあ。わからないね。当<sup>あた</sup>つてみない事には……」

「そう。それじゃ当<sup>あた</sup>つて御覧なさい。あの人ならお兄様<sup>むやみ</sup>に対して無暗<sup>むやみ</sup>な事はしない筈ですから……」

「何だいまるで千里眼みたような事を云うじゃないかお前は……事件の真相を残らず知ってるみたいじゃないかお前は……」

「ええ。知ってるかも知れないわ……でも、それは今云ったら大変な事になって、何もかもわからなくなるから、云わない方がいいと思うわ」

「ふうむ。そんなに云うなら強いて尋ねもしないが、しかしそのわかったって云うのは、犯人に關係した事かい……それとも事件全体に……」

「ええ。そう事件全体の一歩ドン底に隠されている最後の秘密よ。トテモ神秘的な……そうして芸術的にも深刻な秘密よ。それさえハッキリとわかれば妾は自分の生涯を棄てるも、その秘密の犠牲になつて上げていいわ」

「オイオイ。物騒な事を云うなよ……オヤツ。美<sup>み</sup>いちゃん……泣いているのか」

「……だつて……アンマリ可哀そうなんですもの……その秘密の神秘さと、芸術的な深さの前には妾の一生なんか太陽の前の星みたいなんですもの……」

「いよいよ以<sup>もつ</sup>て謎だね」

「ええ。どうせ謎よ。この世の中で一番醜い一番美しい謎よ。それさえ解れば今度の事件の真相が一ペンにわかるわ」

「いよいよわからないね。何だか知らないけど、わからない方がよさそうな気がする」

「ええ。妾もよ。わかつたら大変よ」

「いったいいつからソナ事を感じいたんだい」

「ヤツト今夜感付いたのよ。あの女と貴方のお話を聞いているうちに……」

「……ど……どんな事だい。それは……」

兆策が突然に立上った勢がアンマリ凄まじかったので、妹の美鳥も思わず立上ってしまった。そうして少し涙ぐんだまま頬を真赤に染めた。

「あの女がね……貴方と向い合つて話している横顔を、暗いところからコンパクトの鏡に写してジイツと見ている中に、妾、胸がドキドキして来たのよ……鏡つてものは魔者ね……やつぱり……」

兄妹は見る見る青ざめて行く顔を見合わせた。

「ふうん。どうして胸がドキドキしたんだい」

美鳥はいよいよ涙ぐんだようになって、うつむいた。紅茶を入れかけたままの白いエプロンの端を弄び弄び耳まで赤くなってしまった。口籠もり口籠もり云った。

「呉羽さんはアンマリ……アンマリ美し過ぎると思ったの……」

あくる日も引続いた上天気であつた。

夜が明けると、思い切つて早起して、いつもの通りに凝つた和装の身支度を済ました女優呉羽嬢は、直ぐに轟家の顧問弁護士、桜間法学士を呼付けた。既に自分の名前になつてゐる自宅の建築と地面を抵当に入れて堀端銀行から一万八千円の金を引出し、その中から三千円を分けて江馬兄きょうだい妹いを呼出し、桜間弁護士立会の上で手渡ししてキチンとした受取を入れさせた。それから弁護士を除いた三人で桐ヶ谷の火葬場にタクシーを乗付け、轟九蔵氏の遺骨を受取つて来て故人の自室に安置し、附近の寺から僧侶を招いて読経してもらつた。

焼香の時に一番先に仏前に立つた呉羽は、長い事手を合わせて、何か口の中でブツブツと祈りながら肩を震わして泣いていたが、その態度がアンマリ真剣だったので江馬兄きょうだい妹いは勿論、女中のおヨネまでも眼を潤ませていた。ところが故意か偶然かわからないけれども、そのおしまいがけになつて呉羽の祈つてゐる眩やき声に、何とも云えない気味の悪い底力が這入つて来て、シンとした西洋室まの中にハッキリと沁しみ透り初めたので皆真青になつて顔を見合わせた。

「……何もかも……貴方も……わたくしも……二十年前から間違つて来ておりました……わたくしは、それを自分の手で公表さして頂きとう御座います……正しい姿に改めさせて頂きとう御座います……すべての間違つた恩も怨みも……一掃さして頂きとう御座います……どうぞ成仏なすつて下さい……南無阿弥陀仏……」

それから彼女は、まだ僧侶達が帰らない中に呼びつけのタキシードの高級車を呼んで、弦を離れた矢のように飛出て行つた。一直線に帝国ホテルに乗付けて、東洋一の興行師と呼ばれているトキワ興行社長の段原万平氏に面会し、呉服橋劇場をタツタ五万円で来る九月十日限り売渡す約束をしてしまった。

それから呉羽は又一直線に自宅に引返して桜間弁護士を自分の寝室に呼寄せ、留守の事や契約の事などを色々と細かに頼んで後、呉服橋劇場専属の俳優二十七名の中から選出した男女優僅に十余名を眼立たぬように変装させて、コッソリと上野駅を出発し、どこへか姿を消してしまつたという事が、轟氏殺害犯人の逮捕に引続いて各新聞に報道され、満都の好奇心を聳動した。しかし、それもホンノちよつとの間の事で、世間の人はいつの間にかそんな事を忘れるともなく忘れていた。

とはいえ呉服橋劇場の探偵劇と異妖劇の味を心から愛好していた一部の尖端都会人は、

事実、火の消えたような淋しさを感じていたらしい。折ふし場末の活動館にかかった面白くも何ともない独逸ドイツの怪奇映画「笑う心臓」というのが連日、割れるような大入りを占めたのを見て、そうした怪奇モノに飢えている都会人の心裡うちがアリアリと裏書きされていた。実際、敏感な文壇の人々や劇評家、芸術家の中には「呉服橋劇場を救え」とか「邪妖劇と都会人」とか「怪奇劇と女優」とかいったような「クレハ嬢礼讃」を中心とする文章を来月号の雑誌に投稿すべく、熱心に執筆していた人々も、実際に居たのであった。ところが、こうした一種の純真な意味の都会人の憂鬱は、それから間もない一箇月目に物の美事に粉碎されてしまった。東京市中でも有力な十大新聞の九月四日の朝刊の全面広告を見た人々は皆アツと驚かされたのであった。

その全面広告の中央には五寸四方ぐらいの呉羽嬢の丸髻姿の写真が、薄い小さな唇の片隅から白い歯をすこしばかり洩らした、妖美な笑いを凝固させており、その周囲に一寸角から初号、一号活字ぐらいの赤や黒の大活字が重なり合って踊りまわっていた。「呉服橋劇場蘇える」「新劇場王天川クレハ嬢主演」「邪妖探偵劇——二重心臓」「原作エドガ・アラン・ポーの秘稿」「最近仏国巴里パリ市場に於て二百万法フランを以てグラン・ギニョール座専属パオロ・オデロイン夫人の手に落札せられしもの」「斯界第一人者江馬兆策先生翻案

脚色」「凄絶、怪絶、奇絶、快絶、妖美無上」「九月七日午後五時開場六時開演」「特等（指定）十円」「普通五円、三円、前売せず」等々……それから中一日置いて六日と七日の朝刊には又、奇妙な事に、都下著名新聞の「轟氏殺害事件」に関する記事を一々抄録して掲載し、その最下段に四号活字で次のような説明を付けていた。

「諸君はこの劇を見る前に想起して頂きたい。今日から約一箇月前の八月三日の夜、前当劇場主を殺害した不思議な犯人のことを……。その当時、敏捷なその筋の手配により、事件後数時間を出でずして捕まった犯人生蕃小僧こと、本名石栗虎太は、まだ轟氏殺害の理由について一言も供述せず、従つて一切はまだ巨大な疑問符の蔭に蔽い隠されている現情であるが、偶然にも当日興行される大天才ポー原作の『二重心臓』に用いられている物凄いトリックは、創作後百年を経過した今日に於て、この満天下を震駭した犯行の大疑問符を、遺憾なく抹消するに足る意外千万な鍵を指示している事を筆者は明言して憚らない者である。復活呉服橋劇場第一夜の演題にこの神秘邪妖探偵劇『二重心臓』を筆者が推選した理由は実に懸つてこの一事に潜在しているので、現代社会の裏面の到る処に波打っているであろう邪妖怪『二重心臓』の鼓動が、如何にしてこの奇怪なる大犯罪事件を描き現わしたかという真相、経過を諸君の眼前に展開しあらわす時、諸君の

脈搏を如何に乱打させ、諸君の血管を如何に逆流させ、全身を粟立たせ、頭髮を竦しやうり立つせしめるであらうか。凄愴感、妖美感に昏睡せしむるであらうかは、筆者の想像の及ぶところでないであらうことをここに謹んで付記しておく。九月 日 江馬兆策識」

なおそうした記事の中央に在る血潮の滴る形をした真赤な？符ぎもんふの輪の中に髪を振乱した呉羽嬢がピストルを真正面に向けて高笑いしている姿が荒い網目版で印刷してあつた。

「まあ。お兄さま」

「おお。美鳥みいちやん。御機嫌よう」

「まあ……今夜の入場者タイヘンじゃないの。コワイみたいじゃないの——」

「ウン。呉服橋劇場空前のレコードだよ」

「あたし此席ここへ来るのに死ぬ思いしてよ。正面の特等席で云つたんですけど、入口から這入ろうとすると押潰されそうになるんですもの。ヤット寺本さんに頼んで楽屋口から入れてもらったのよ……ああ暑い……ずいぶんお待ちになって……」

「イヤ。ツイ今しがたここへ来たんだ」

「あら。お兄様ずいぶん日にお焼けになったのね」

「ヤツト気が付いたのかい。フフフ。これあ温泉焼けだよ。紫外線の強いトコばかり廻っていたからね。お前は元気だったかい」

「ええ。モチよ。あたし四五日前から神戸に行つてたのよ。そうして今朝、家へ帰つてから、貴方の電報を見てビックリしてここへ来たのよ」

「神戸へ何しに行つたんだい」

「それが、おかしいのよ。六甲のトキワ映画ね。あそこから大至急で秘密に来てくれつてね。あのアルプスの主婦<sup>ママちゃん</sup>の妹さん……御存じでしょう。会計をやつてらっしゃる貴美子さん……いつも妾<sup>わたし</sup>達<sup>たち</sup>によくして下さる。ね……あの人に頼まれたもんですからね。

貴美子さんと二人で行つてみたらトテモ大変な目に会わされちゃつたのよ」

「何か唄わせられたのかい」

「それが又おかしいのよ。着くと直ぐに美容院の先生みたいな人が妾を捕まえて、お湯に入れて、お垂髪<sup>さげ</sup>に結わせて、気味の悪いくらい青白いお化粧をコテコテ塗られちゃつたのよ」

「ハハア。スクリン用のお化粧だよ。それじゃあ……エキストラに雇われたんだね」

「ええ。そうらしいのよ。筋も何もわからないままに、美術学校のバンドを締めさせられて、学校の教壇みたような処へ立たされて『螢の光』を日本語で歌わせられたの……そうして三分ばかりして歌が済んじやったら監督みたいな汚ない菜葉服なっぱの人が穴の明あいたシヤツポを脱いでモウ結構です。アリガトウ……って云ったきりドンドン他の場面を撮り初めるじゃないの。おまけに皆みんなして妾をジロジロ見ているでしょう。貴美子さんはソコイラに居ないし、帰り道は知らないし、妾、どうしていいかわからなくなっちゃって、モウ些すこしで泣出すところだったのよ」

「馬鹿だね。エキストラなんかになるからさ」

「そうしたらね。その中うちにどこからかヒョククリ出て来た貴美子さんが、妾をモウ一度お湯に入れて、身じまいを直させている中うちに、頬ペタに赤痣あざのある五十位の立派な紳士の人が、セツトの中で、妾に近付いて来てね。妾に名刺を差出しながら、どうも飛んだ失礼を致しました。こちらヘドウゾと云ってね。妾と貴美子さんを自動車へ乗せてミカド・ホテルへ連れて行ってサンザ御馳走をして下すった上にね。京都や大阪や奈良あたりを毎日毎日、御自分の高級車で同乗して、見物させて下すったのよ。どこか貴方とお兄様とで、別荘をお建てになりたい処があったら、御遠慮なく仰言って下さい……トテモお兄さま

の脚本を賞めてらしたわ」

「オイオイ。お前ドウカしてやしないかい」

「イイエ。ほんとの話なのよ。そうして帰りがけにトテも立派なりネンの洋服と、ダイヤの指輪と、舶来の帽子とハンドバッグと、靴と、トランクと、一等寝台の切符と……」

「チョット待つてくれ美鳥……イヨイヨおかしい。美鳥は僕の留守に、竈の神様へ唾液を吐きかけるか何かしたんだね」

「アラ。そんならお帰りになつてから品物をお眼にかけるわ。また、そのほかにお金を千円頂いたのよ」

「タツタ三分間でかい」

「ええ。ここに持つてるわ」

「馬鹿。いい加減にしろ」

「あら。お聞きなさいったら……それから帰つて来てロッキーの支配人にお眼にかかつて、そんなお話をしたら……貴美子の奴、飛んでもないイタズラをしやがる……つてね。真青になつて聞いてらしたわ。そうしてイキナリ私の前に手を突いて、どうもありがとう御座いました。よく帰つて来て下さいました。あの人にかかっちゃ叶いません。どうぞ、こ

れから後トキワ映画へお這入りになるような事がありましたも、私の方の契約だけは、お約束通りにお願ひ致します……つてペコペコあやまつてんの。ツイ今サツキの事よ。あたし何の事だか、わかんなくなつちやつたわ」

「その名刺、ここに持つてんのかい」

「ええ。ここに在るわ。段原つていう人よ。あたしどこかで聞いた事があるように思うんですけど……」

「エツ……段原……それあお前アノ興行王じゃないか……東洋一の……」

「アラツ。そうそう……あたし写真ばかり見てたから気が付かなかつたんだわ。あの人に妾見込まれたのか知ら……」

「……ウーム。大変な事になつちやつたね」

「あたしドウしましょう」

「ところで本職のロツキー・レコードの方の成績はドウダイ……」

「それが又おかしいのよ。故郷おくにの小唄ばかり入れさせられるのよ。故郷おくにの発音を西洋人が聞くとトテモ音楽的なんですつてさあ。他の人が歌ったんじゃ駄目なんですつて……」

「妙だね。ウツカリすると、そいつもやつぱりメード・イン・ジャパンのお蔭かも知れな

いぜ」

「そうかも知れないわ。でもね、妾の唄った『島の乙女』の裏表が七千枚ずつ二度も垂<sup>アメ</sup>米<sup>リカ</sup>利加へ出たそうよ。ですから妾、今月はトテモホクホクよ」

「……驚いたね。アンマリ早くエラクなり過ぎて恐しいみたいじゃないか」

「そうしてお兄様の方の成績はドウ？」

「お前とウラハラだ。何もかも滅茶滅茶さア」

「まあ。でも無事にお帰りになつてよかったわ」

「いや。まだわからないよ。無事かどうかだか」

「どうしてコンナに早くお帰りになつたの……九月の十日過に帰るって仰言つたのに……」

「どうしてつてあの今月四日の新聞を見たからさ。急に心配になつて来たからね」

「……アラ……妾もよ。ずいぶん心配しちゃったわ。だつてお兄様が熱海からお送りになつた、今度のお芝居の脚本を弁護士桜間さんにお渡しする前にチョット盗み読みしてたでしょう。あの脚本でアンナ大袈裟な広告をするなんて、ずいぶんヒドイと思つたわよ。呉羽<sup>みのうえばなし</sup>さんの身上話まる出しなんですもの。ポーの原作でも何でもありやしない」

「ウン。僕が心配したのもソレなんだよ。立派な広告詐欺だからね。おまけにお前、あの

脚本は呉羽さんの命令で全部骨抜きだろう。今度の事件の核心に触れているところなんかコレンバカリもありあしない。何でもカンでも上演脚本アゲホンがパスさえすれば、それでいいって云うんだからその通りに書いておいたのさ。それから直接に桜間弁護士に立山から長い電報を打って様子を聞いてみると、あの脚本にはロクに眼も通さないまま、呉羽さんが出発しちゃったという返事だろう。弱ったよ全く。ドンナ本読みをしてドンナ稽古を附けているんだか丸きり見当が付かないんだからね。笠のオヤジの生蕃小僧問題なんかホツタカしちやって、座員の寺本に電報を打って、この特等席を二つ取ってもらって、その返事を見てから大急ぎで帰って来たんだがね。その途中で美鳥みいちゃんにあの電報を打ったのさ」

「道理で……あたし、ちよつと意味がわからなかったわ。だって『スグテラモトニデンワセヨ』っていうんですもの。あたしアンナ女たらしの役者の人に会わなくちゃならないのかと思ってヒヤヒヤしちやったわ」

「美鳥みいちゃんは相変らずお固いんだね」

「笠さんは今、どこに居らして？」

「もう帰って来ている筈だがね。越中の立山に居たんだが」

「アラ。マア。あんな処へ……」

「ウン。どうやらお前の予言が当たらしいんだ。俺は呉羽さんから良い加減ドンキホーテ扱いにされていたらしいんだ」

「まあ……どうして……」

「どうしてって馬鹿な話さ。笠支配人は何でもないんだよ。僕がああ脚本を書上げると直ぐに、彼奴あいつに取りかかってやったんだ。犯人は貴様だろう……って威嚇おどかし付けてやったら、一ペンに青くなっちゃってね。色々弁解しやがるんだ。下らないアリバイなんか出しやがってね……そのうちにドウモ此奴こいつは生蕃小僧なんて恐れられるようなスゴイ人物じゃないらしいって感じがして来たんだ。しかし、それでも猫を冠っているんじゃないかと思つて、色々変相して附け狙つていると、彼奴あいつめ殺されるとでも思つたのか、素早く俺の変装を看破して、アツチ、コツチの温泉を逃げまわりやがるんだ。アイツは余つ程、温泉が好きなんだね。しかも行く先々で彼奴あいつの狒々老ひひおやじ爺爺振りを見せ付けられてウンザリしちゃったよ。まったく……」

「妾も大方ソナ事でしょうと思つてたわ」

「そのうちに今月の五日になつて、立山温泉で東京の新聞のアノ広告を見ると正直のところ、二人ともビックリしちゃったんだね。これは大変だ。飛んでもない事が初まらなけあ

いいがと気が付くトタンに、二人とも何となく呉羽さんに一パイ喰わされて、睨めっこをさせられているような気がし初めたんだね。そこでドツチからともなく二人が寄り合つて、ザツクバランに膝を突き合わせて話合つてみると、ドウモ呉羽さんの二人に云つた言葉尻が怪しい。これはこの興行の邪魔にならないように、吾々二人を東京から遠ざける計略じやなかったのか……呉羽さんは、こうして吾々二人が承知しそうにない無鉄砲な興行を、自分一人でやつつける了りようけん簡じやないのか……という事になつて来ると、まさかとは思ひながら二人とも急に不安になつて来たもんだから、大急ぎで勝手な汽車に乗つて帰ることに話をきめたもんだ」

「ずいぶん鈍感ねえ。お二人とも……」

「そう云うなよ。呉羽さんの腕が凄いんだよ」

「それからドウなすつて……」

「ところがサテ……歸つて来てみると俳優たちは一人残らず口止めをされていると見えて、芝居の筋なんか一口も洩らさない。それから考えて楽屋裏の大道具を覗いてみると、まだハッキリはわからないが、ドウモ僕の注文した場面とは違ふような道具が出て来るらしいので、イヨイヨ心配になつて来た。だから藪蛇かも知れないとは思つたがツイ今しがたの

事だ。此席へ来る前に警視庁の保安課へ寄って、興行係の片山っていう心安い警部に会って、済まないがもう一度あの上演本あげほんを見せてもらえまいかって頼むとドウダイ。イキナリ僕の手をシツカリと握って離さないじゃないか……あの筋書はどこから手に入れた……って眼の色を変えて聞くんだ。俺あギョツとしちやつたよ。まったく……」

「……そうでしょうねえ……ホホ……」

「片山警部の話はこうなんだ……あの二通の上演脚本あげほんは八月の十五日に願人ねがいじんの桜間っていう弁護士から受取って、九月の三日に許可したものだ、その九月六日……昨日きのうの朝の事だ、新聞の広告を見た大森署の司法主任の綿貫警部補っていうのがヒョツコリと警視庁へ遣って来て、あの『二重心臓』の上演脚本あげほんを見せてくれと云うのだ。お安い御用だといふので見せてやると、読んでいる中に綿貫警部補の顔が真青になって来た。……済まないが、ほんのチョットでいいからこの脚本ほんを貸してもらえまいかという中に、引つたくるようにポケットに突込んで、無我夢中みたいに自動自転車オートバイに飛乗って帰った」

「……まあ怖い……」

「それから夕方になって汗だくだくの綿貫警部補が、礼を云い云い返しに来た時の話によると大変だ……あの筋書は、この間死んだ轟九蔵氏と、犯人以外に一人も知っている筈が

ない。きょうが今日まで犯人に、あの筋書と同じような事実について口を割らせようと思つて、どれ位、骨を折つたかわからないんだが、あの上<sup>あげ</sup>本<sup>ほん</sup>が手に這入つたお蔭で犯人がヤット口を割つた。多分作者が、死んだ轟氏から秘密厳守の約束か何かで聞いていた話だろうと思つて、まだ大森署に置いてある犯人に、あの筋書を読んで聞かせて、間違つてゐる処を訂正させた<sup>ついで</sup>序に、呉羽さんの興行の話を聞かせてやったら、ドウダイ突然に顔色を変えて、その興行を差止めて下さいと怒鳴り出したもんだ。折角の私の苦心が水の泡になりますと云うんだそうだ」

「生蕃小僧がそう云うの……」

「ウン。怖い顔から涙をポロポロこぼして泣きながら、私の一生のお願いで御座います。ドウセ死刑になります身体<sup>からだ</sup>に思い残す事はありませんが、こればかりはお情です。どうぞドウゾお助けを願います。さもなければここで舌を嚙んで死にます……と云つて、しまいにはオデコを板張に打ち附けて、顔中を血だらけにして、キチガイのように暴れまわりながら哀願するんだそうだ」

「……まあ……何て気味の悪い……」

「……だから綿貫司法主任が、そんならその貴様の苦心というのは何だつて聞いてみたら、

こればかりは御勘弁を願います。とにかくそのお芝居ばかりは、お差し止めにならないと大変な事になります。さもないければ、そのお芝居の初まる前にモウ一度天川呉羽さんに会わせて下さい。お願いですお願いですと滅法矢鱈に駄々を捏ねて聴かないのには往生した。死刑囚にはよくソナ無理な事を云つて駄々を捏ねる者が居るそうだがね。それにしても何が何だか訳がわからないもんだから、昨日から大騒ぎをして僕の行衛を探していたところだった……という、その保安課の片山警部の話なんだ」

「まあ……それからドウなすつて……」

「僕も何が何だか、わからなくなっちゃったからね。ナア二、あの脚本はやはりお察しの通り轟さんから生前に聞いた通りの事を勧善懲悪式に脚色しただけのものなんです。それじゃ今から大森署へ行つて、司法主任に会つて、よく相談して来ましょう……と云つて、逃げるように警視庁を飛び出して来たのがツイ二時間ばかり前なんだ。それから危ないと思つてここに来て、楽屋裏に隠れていたんだ。ウツカリ捕まると、芝居が見られなくなると思つたからね」

「まあ。それでヤツト訳がわかつたわ。あのね、警察の人にはドンナ事があつても呉羽さんから聞いたつて仰言つちや駄目よ」

「勿論さ。轟さんから直接に聞いた事にするつもりだが、それでも今夜、この芝居を見た  
ら直ぐにも大森署へ行ってみなくちゃならん。犯人にも会わなくちゃなるまいかと思っ  
ているんだが、とにかくこの芝居の演出を見た上でないと、カイモク方針が立たないんだ」  
「どうして犯人がソナナにこの芝居を怖がるのでしょうか。どうせ死刑になる覚悟なら、そ  
れより怖いものはない筈でしょうに……」

「さあ。ソナナ事はむろん、わからないね」

「それにしても今夜の場内いりスゴいわね。この中に生蕃小僧の人氣が混っていると思うと、  
妾何だか氣味が悪いわ。みんな死刑を見に來たような顔ばかり並んでいるようで……」

「ウン。これが又、僕の心配の一つなんだ。あの広告じや、たしかにインチキの誇大広告  
だからね。第一ポオの原作っていうのからして大ヨタなんだから……僕が夢にも思い付か  
なかった作り事なんだからね。今夜の演出がわかったらキット興行チリンチリン差止を喰うにきまつて  
いる」

「アラ。今夜のお芝居も駄目になるの」

「イヤ。そんな事はないだろう。ドンナに無茶な芝居を演やったって、思想や風教や政治向  
に關係してない限り、その場で臨席の警官から差止められるような事は、今までに一度も

例がないんだからね……問題は明日の芝居なんだが」

「呉羽さんは今晚一晩でウント売上げようと思っていらっしゃるんじゃないの。罰金覚悟で……」

「そうかも知れんね」

「そんならトテモ凄い興行師じゃないの」

「ウン。しかも、そればかりじゃないんだよ。あの女は世界に類例のない偉大な女優であると同時に、劇作と犯罪批評の天才だよ。……同時に悪魔派の詩人かも知れないがね」

「あたし何だかドキドキして来たわ」

「暑いからだろう」

「イイエ。呉羽さんの天才が怖くなって来たのよ。ドンナ演出をなさるかと思って……」

こんなヒソヒソ話が進行しているのは一階正面中央の特等席であった。旅疲れのままで、一層、醜くくなった職工風の江馬兆策と、青白いワンピースに、タスカンのベレー帽をチョツと傾けた、女学生みたいに初々しい美鳥の姿は、世にも微笑ましいコントラストを作っているのであった。

呉服橋劇場内は、文字通りの殺人的大入であつた。あまりの大入りなので観客席の整理が不可能になつたらしい。外廊そとろうから舞台の直前まで身動き出来ない鮎詰すしづめで、一階から三階までの窓を全部明放あけはなし、煽風機、通風機を総動員にしても満場の扇うちわの動きは止まらないのに、切符売場の外ではまだワアワアと押問答の聲が騒いでいるのであつた。

定刻の六時に五分前になると場内から拍手の洪水が狂騰した。その真正面の幕前の中央に、若い背の高い燕尾服の男が出て来て、恭しく観客に一礼して後、何事か喋舌しゃべり出したからであつた。それも最初の間はさながらにこうした未曾有みぞうの満員状態を面白がっているような盲目的な拍手に蔽われて、言葉がよく聞き取れなかつたが、その中に群集うちのドヨメキが静まると、やがて若々しい朗らかな声が隔々までハッキリと反響し初めた。

「あら。アレ寺本さんじゃない？」

「ウム。以前もとはロッキ―専属のテノルで相当のところだつたよ」

「いい声ね……」

「ええ。ところで早速では御座いますが、今晚のお芝居の興味の中心と申しますのは、広告にも掲載致しました通り、前の当劇場主、故、轟九蔵氏を殺害致しました犯人の、まことに古今に類例のない恐ろしい心境を脚色し、的確にして且つ、意外千万な真犯人を指摘

致しますとところに在りますので、特に、最後の一幕と申しますのは、このたび新しい当劇場主と相成りました天川呉羽嬢の独白、独演と相成っているので御座います。ふつつかながら斯界しかいに於きまして、仏蘭西フランスのパオロ・オデロイン夫人と相並んで、邪妖探偵劇の二明みようじよう星とキワメを附けられております天才女優、天川呉羽嬢が、その最後の独白、独演において、どのような物凄い演出を行い、この二重心臓の舞台面を、どのように戦慄的なクライマックスにまで導きますかという筋書は、遺憾ながら当の本人の天川呉羽嬢以外に、作者、座員一同の誰もが一人として存じておりませぬ事を、前以てお含みまでに申上げておきます。……すなわち今晚御来場の皆様は、過般、満都の諸新聞に報道されました探偵劇王、轟氏の遭難の実情を、一方ひとかたも残らず御存じの事として演出致しますので、従つてその遭難の実情に関する説明は、勝手ながら略さして頂きます。そうしてここにはただ斯か様な、予期致しませぬ過分の御ひいきのために、万一プログラムを差上げ落しました方が、おいでになりはしまいかと存じますから、そのような方々の、単なる御参考と致しまして、極めて心理的に構成されております各幕の内容を短簡に申上げさして頂くに止めます。

第一幕……探偵劇王殺害事件の遠因——兇賊生蕃小僧と等々力久蔵親分活躍の場面。二場。

第二幕……探偵劇王殺害の動機、及、殺害の現場<sup>げんじょう</sup>。二場。

第三幕……探偵劇王の後継者、天川呉羽嬢、独白、独演。真相説明の場。一場。——以上——

満場割れむばかりの拍手が起つたが今度は直ぐにピツタリと静まった。舞台の片隅で冷たいベルの音が断続する中に、幕が静かに揚り初めたからであつた。

一階から三階までの窓は全部、いつの間にか閉されていた。場内はたまらない薄暗さと、蒸暑さに埋もれていたが、それでも何千の人が作る氷のような好奇心が、場内一パイに冴え返っていたせいであつたろう。扇<sup>おうぎ</sup>の影一つ動かない深海の底のような静寂さが、一人一人の左右の鼓膜からシンシンと泌<sup>しみ</sup>み込んで来るのであつた。

第一幕、第一場は、静岡県見付の町外れの国道に面する草原<sup>くさはら</sup>の場面であつた。その草原の中央の平石に腰をかけている若親分、等々力久蔵の前に、金モール服<sup>オツチニ</sup>の薬売人に化けた生蕃小僧こと、石栗虎太が胡座<sup>あぐら</sup>をかいて、ポケットの中からピストルを突付け、等々力久蔵の妻君の不行跡を曝露し、嘗て、或る処で、自分が等々力の妻君から貰つたという紫水晶<sup>かんざし</sup>の簪を見せびらかしつつ、甘木柳仙宅襲撃の仕事を見逃がしてくれるように頼み込む。等々力久蔵は暫く考えてから承諾の証拠に、紫水晶の簪を受取り、生蕃小僧と別れる。そ

れから生蕃小僧が立去つて後に、妻と世話人を草原に呼んで来て、証拠の簪を突付け、嚴そかに離別を申渡し、涙を払いながら決然として立去る。木立の蔭からその光景を窺っていた生蕃小僧が立出で、腕を組んだまま物凄く冷笑を浮かべて等々力久蔵の後姿を見送り、「トテモ追出しやあしめえと思つたが……この塩梅では愚図愚図しちやいらねえぞ」と独りでうなずきながら立去る場面であつた。

続いて舞台がまわると甘木柳仙自宅の場で、等々力久蔵が柳仙夫婦から娘の三枝を借受け、それとなく三枝に左様ならを云わせ、思入れよろしくあつて退場する。そのままの場面で日が暮れると生蕃小僧が忍び入り、柳仙夫婦を惨殺し、家中を探しまわつて僅少の小遣錢を奪い、等々力久蔵に計られたかなと不平満々の捨科白を残して立去るところであつた。

幕が締ると皆ホツとして囁き合つた。

「ねえお兄様。イクラか書換えてあつて？」

「ウン。それが不思議なんだ。この幕は大体から見て僕が書下した通りなんだ。あんな大道具をどこに蔵つて在つたんだろう……ただ柳仙夫婦の殺されの場がすこし違ふようだね。あんな風に老人の柳仙が頭からダラダラ血を流して拝むところなんぞはなかったよ。キッ

ト睨まれると思つたからカゲにしておいたんだがね」

「警察の人は来ているんじゃないか」

「来ても今晩は何も云わないのが不文律みたいになっているから大丈夫だよ。その代り明日<sup>あす</sup>になるとキツト差止めるとか何とか威かして来るにきまっているんだ。もつとも呉羽さんは、それを覚悟の前で演<sup>や</sup>つてるのかも知れないがね」

「……でも轟さんと呉羽さんの前身だけは今の幕で想像が付くワケね」

「ナアニ。みんな芝居だと思つて見ているんだから、そんな余計な想像なんかしないでらう」

「そうかしら……でもポオの原作なんて誰も思やしないわよ。あれじゃ……」

「フフフ。黙つてろ。幕<sup>あ</sup>が開くから……オヤア……これあ西洋室<sup>ま</sup>だ……おれア日本室<sup>ま</sup>にしたい筈だが……」

「……シツシツ……」

第二幕の第一場は大森の天川呉羽嬢邸内、轟九蔵氏自室の場面であつた。部屋の構造から品物の配置、主人轟九蔵氏の扮装に到るまで、すべて実物の通りで、窓の外に咲き誇っている満開の桜までも、寸分違わない枝ぶりにあしらつてある。

その東の窓際の寝椅子に、着流しの轟九蔵氏が長くなっている足先の処に、美術学校の制服を着た、イガ栗頭の江馬兆策に扮した俳優が腰をかけている。その前に音楽学校のバンドを締めた美鳥ソツクリの少女が姿勢正しく立つて、美鳥のレコードを蔭歌にして独唱をしている体<sup>てい</sup>。それを轟氏が、如何にも幸福そうに眼を細くして聞いている。

「うらわかき吾が望み 青々と晴れ渡り

かがやかに雲流る 大空よああ大空よ」

「うらわかき吾が思い はてしなく澄み渡り

すずろかに風流る 大空よああ大空よ」

「ウム。なかなか立派な声になった。学校というものは有難いものだ」

<sup>きょうだい</sup>  
兄 妹 同時に頭を下げる。

「ありがとうございます」

「ああ。御苦労だった、お蔭でいい心持になった……ウム。それからなあ。きょうは久しぶりに娘の三枝と一所に夕食を喰べるのじやから、お前たちも来て一所に喰べてくれ」

二人顔を見合わせて喜ぶ。

「ハハハ。嬉しいか」

「ありがとうございます」

「おじさま。ありがとう」

「うむ。なかなか言葉が上手になったな。もう日本人と変らんわい。ハハハ。どうだい。お前たちは日本と朝鮮とドツチが好きかね」

「僕日本の方が好きです」

「何故日本が好きかね」

「朝鮮には先生みたいに外国人を可愛がる人が居りません」

「ハハハ。外国人はよかつたな。美鳥はどうだい」

「あたし豆満江とまんこうがもう一ペン見とう御座いますわ」

「うむうむ。その気持はわかるよ。あの時分はお前達と雪の中で、ずいぶん苦労したからなあ」

「おじ様が毎日鮭さけを捕えて来て、あたし達に喰べさして下さいましたわね」

「アハハハ。ところでお前たちは、あれから毎日毎日三枝と兄きょうだい妹まいみたようにして暮して来ているが、これから後のちも、このおじさんに万一の事があつた時に、今までの通りに仲よくして暮して行けるかね。参考のために聞いておきたいが……」

「出来ます。僕、呉羽さん大好きです」

「美鳥はどうだい」

「わたくし……好きです……トテモ。ですけど……何だか怖<sup>こ</sup>おう御座いますわ」

「ナニ怖い。どうして……」

美鳥、恥かし気にしなだれる。轟氏もキマリ悪るそうに顔を撫でて笑う。

「怖いことなんかチツトモないんだよ。アレは負けん気が強いし、小さい時から世の中のウラばかり見て来とるから、あんな風になったんだよ。ホントは実に涙もろい、純情の強い人間なんだよ」

「呉羽さんはエライ女<sup>ひと</sup>ですよ。何でも御存じですからね。悪魔派の新体詩だの、未来派の絵の批評が出来るんだから僕、驚いちやった」

「ウム。わしの感化を受けとるかも知れん。わしも元来は平凡な、涙もろい人間と思うが、あんまり早くエライ人間になろうと思うて、自分の性格を裏切った人生の逆コースを取って来たために、物の見え方や聞こえ方が、普通の人間と丸で違ってしもうた。悪魔のする事が好きで好きで叶<sup>かな</sup>わん性格になってしもうた。ハハハ。怖がらんでもええぞ美鳥……お前たち兄<sup>きょうだい</sup>妹<sup>い</sup>に対しては俺はチツトモ悪魔じゃない。平凡な平凡な涙もろい人間だ……」

その平凡な平凡な人間に時々立帰ってホツと一息したいために、お前達を養っているのだ……イヤ詰まらん事を云うた。それじゃ又、晩に来なさい。夕飯の準備が出来たら女中を迎えに遣るから……」

「おじさま……さようなら……」

「先生……さようなら……」

「ああ。さようなら……」

二人が退場すると轟氏よびりん呼鈴を押し、這入って来た女中に三枝を呼んで来るように命じ、そのまま寝椅子に長くなる。

大きな桃割ももわれ。真赤な振袖。金糸ずくめの帯を立矢たてやの字に結んだ呉羽がイソイソと登場する。

「あら……お父様。お呼びになったの」

「……うむ。こつちへお出で……」

「……嬉しい。又、どこかのお芝居へ連れてって下さるの」

と呉羽嬢が甘たれかかるのを抱きあげて身を起した轟氏は立上って、入口の扉ドアに鍵おろを卸し、窓のカーテンを閉とぎして異様に笑いながら寝椅子に帰り、呉羽の身体からだを抱き上げる。

「きょうは、私の方からお前にお願ひがあるんだよ」

と少し真面目に帰りながら、二人の身の上話を初め、前の幕の通りの事を簡略に物語り、二人が真実の親子でない事を明らかにする。

その一言一句に肩をすぼめ、眼を閉じて覺えながらも、不思議なほど冷然と聞いていた呉羽は、やがて冷やかな黒い瞳をあげて微笑する。

「それで妾にお願ひつて仰言るのはドンナ事なの……」

轟氏は忽ちハラハラと涙を流し、熱誠を籠めた態度で、呉羽の両手を握る。

「……才……俺は、お前を一人前に育て上げてから、両親の讐仇<sup>かたき</sup>を討たせようと思って、そればかりを楽しみの一本槍にして、今日まで生きて来たんだ」

「……まあ……そんな事……どうでもよくつてよ。今までの通りに可愛<sup>かたき</sup>がつて下されば、あたしはそれでいいのよ」

「……ウウ……そ……それは……その通りだ。……と……ところがこの頃になって……俺は……俺に魔がさして来たんだ。もちろん最初の目的は決して……決して忘れやしない。必ず……必ず貫徹させて見せる。生蕃小僧は、お前の一生涯の讐敵<sup>かたき</sup>だから、この間お前が頼んだように、誰にもわからない処で、一番恐ろしい……一番気持のいい方法で讐敵<sup>かたき</sup>を取

らしてやる決心をして、現在、極秘密の中に、この家の地下室でグングン準備を進めているところだが……」

「……アラッ……ホント……」

「ホントウだとも。もつとも二……二三年ぐらいはかかる見込だがね。骨が折れるから……」

「嬉しい。楽しみにして待っていますわ」

「……と……ところがだ。この頃になったら、その上に……も……もう一つの別の目的が……オ……俺の心に巢喰い初めたのだ。そそ……その目的を押付けようとすればする程……その思いが募って……弥増<sup>いやま</sup>して来て……もうもう一日も我慢が……で……出来なくなつて来たんだ」

「まあ。そのモウ一つの目的ってドンナ事？」

「オ……俺は……お前をホントウに俺のものにしたくなつたのだ。ああ……」

轟氏は涙を滝のように流し、両手を顔に当てる。呉羽は本能的に飛退<sup>とびの</sup>いて、傍<sup>そば</sup>の椅子を小楯に取り冷やかに笑う。

「まあ。あなた馬鹿ね。あたし今でも貴方のものじゃないの。この上に妾にどうしろって

仰言るの……」

「ウ……嘘でもいいから……オ……俺の妻になったつもりで……俺に仕えてくれ」

「あら。厭な人。あなた妾を恋して、いらつしやるのね」

轟氏は寝椅子からズルズルと<sup>すべ</sup>下り落ちてペツタリと両手を床に支える。乞食のようにペコペコと頭を下げる。

「そ……そうなんだ。タ……助けると思つてこの俺の思いを……」

呉羽、椅子の背中に掴まつたまま、仕方なさそうに身を<sup>そ</sup>反らして高笑いする。

「ホホホホホホホホ可<sup>おか</sup>笑しな方ね。ホホホホホホホ……」

その笑い声の中に電燈が消えて、場内が真暗になつても、笑い声は依然として或は妖艶に、或は奇怪に、又は神秘的にそうして忽ちクスグツタそうに満場を<sup>こわく</sup>轟惑しいしい引き続いている。

そのうちにソノ笑い声が次第に淋しそうに、悲しそうに<sup>とおの</sup>遠退いて行つて、やがてフツツリと切れるトタンに舞台がパツと明るくなり、第二幕の第二場となる。

呉羽の姿は見えず。黒つばいモーニングコートに<sup>しま</sup>縞ズボン白<sup>チヨツキ</sup>胴衣の轟氏がタダ独りで、事務机の前の廻転椅子に腰をかけて、金<sup>きんぐち</sup>口煙草を吹かしながら一時二十五分を示してい

正面の大時計を見ている。左側のカーテンを引いた窓硝子の外に電光がしきりに閃めくと、窓の前の桜がスツカリ青葉になっているのが見える。その電光の前に覆面の生蕃小僧が現われコツコツと窓硝子をたたく。

轟氏が立つて行つて開けてやると両足を棒のように卷いた生蕃小僧が、手袋を穿めた片手にピストルを持って這入つて来る。

「ハハハ。よく約束を守つたな」

轟氏は用意の小切手を生蕃小僧に与える。

「この次は真昼間、玄関から堂々と這入つて来い。夜は却つて迷惑だ」

「卑怯な事をするんじゃないやあめえな」

「俺も轟九蔵だ。貴様はモウ暫く放し飼いにしとく必要があるんだ。今日は特別だが、これから毎月五百円宛呉れてやる。些くとも二三年は大丈夫と思え」

「そうしていつになったら俺を片付けようというんだな」

「それはまだわからん。貴様の頭から石油をブツ掛けて、火を放つて、狂い死させる設備がチャントこの家の地下室に出来かけているんだ。俺の新発明の見世物だがね……グラン・ギニョールの上手に行く興行だ。その第一回の開業式に貴様を使ってやるつもりだが……」

…

「そいつは有り難い思い付きだね。しかし断つておくが、俺はいつでも真打だよ。前座は貴様か、貴様の娘でなくちや御免蒙るよ」

「それもよからう。しかしまだ見物人が居らん。一人頭千円以上取れる会員が、少くとも二三十人は集まらなくちや、今まで貴様にかけて経費の算盤そろばんが取れんからな。とにかく油断するなよ」

「ハハハ。それはこつちから云う文句だ。貴様が金を持つている限り、俺は貴様を生かしておく必要があるんだ。俺はまだ自分の弗箱ドルばこに手を挟まれる程、耄碌もうろくしちゃいねえんだからな……ハハんだ」

「文句を云わずにサツサと帰れ。俺は睡いんだ」

轟氏、生蕃小僧が出て行つた窓をピツタリと閉め、床の上の足跡を見まわし、葉巻に火を付けながら何か考え考え歩きまわっている中に、微かな電鈴の音を聞き付け、

「ハテナ。電話かな」

とつぶやきながら廊下へ出て行く。入れ代つて大きな白い手柄の丸髷びすいに翡翠かんざしの簪、赤い長襦袢、黒っぽい薄物の振袖、銀糸ずくめの丸帯、白足袋しろたび、フェルト草履ぞうりという異妖な姿

の呉羽が、左手の扉<sup>ドア</sup>から登場し、奇怪な足跡に眼を付け、一つ一つに窓際まで見送って引返し、机の上の小切手帳を覗き込んで何やら首肯<sup>うなず</sup>き、唇をキツと噛んで部屋の中をジロジロ見まわしながら考えている中に突然、ポンと手を打合わせてニツコリ笑い、残忍な眼付で入口の扉<sup>ドア</sup>を振り返りつつ、机の上の短剣型ナイフを取上げて素早く帯の間に隠すところへ、電話をすました轟氏が帰って来て悠々と扉<sup>ドア</sup>を閉め、立っている呉羽と向い合つてギョツとする。

「ナ……何だ……何だ今頃……何か用か……」

「ハイ。きよう……昼間にお願ひ致しました事の、御返事を聞かして頂きに参りましたの」

「美鳥と結婚したいという話か」

「ええ……貴方の眼から御覧になつたら、飼つて在る小鳥が、籠の中から飛出したがつている位の、詰まらないお話かも知れませんが……妾……あたしこの頃、急にそうして、今までの妾の間違つた生活を清算したくてたまらなくなりましたの」

「ならん……そんな馬鹿な事は……俺の気持ちも知らないで……」

「ホホ。お憤<sup>いきどお</sup>りになつたのね。ホホ。それあ今日までの永い間の貴方のお志は何度も申します通り、よくわかつておりますわ。……ですけど……あたしだって血の通っている人間

で御座いますからね。最初から貴方のお人形さんに生れ付いている犬猫とは違いますからね。もうもう今までのような間違った、不自然な可愛がられ方には飽き飽きしてしまいましたわ」

「……カカ……勝手にしろ。馬鹿。俺のお蔭で生きているのが解らんか」

「どうしても、いけないって仰言るの……」

「ナランと云うたらナラン……」

と云い捨てて廻転椅子に腰をかけ、事務机の上を片付け初める。

「オヤ。紙小刀<sup>かみきり</sup>が無い。鞄<sup>さや</sup>はここに在るんだが……お前知らんか……」

「存じませんわ。ソナなもの……」

「彼品<sup>あれ</sup>はトレード製の極上品なんだ。解剖刀<sup>メス</sup>よりも切れるんだから無くなると危険<sup>あぶな</sup>いんだ。

鞄に納めとなくちや……」

「よござんすわ。あたし、どうしても美鳥さんと結婚してみせるわ。キットこの家<sup>うち</sup>で美鳥さんに子守唄<sup>ラバイ</sup>を唄わせて見せるわ」

「……………」

「何と仰言ったって美鳥さんを逐出<sup>おいだ</sup>させるような残酷な事は、断じて、断じてさせないわ」

「……勝手にしろッ。コノ出来損ないの……カカ片輪者の……ババ馬鹿野郎ッ……」

「ネエ。いいでしょう……ねえ。ねえエ……あたしだってモウ……年頃なんですもの才……」

と云ううちに轟氏の背後から廻転椅子ごしに甘えかかるようにして頬をスリ寄せながら、帯の間から短剣を取出し、白い腕の蔭に隠して轟氏の胸に近付け、不意に両手で握って力任せにグツと刺す。

「ガッ……ナ何を……するッ……ガアッ……ムムムム……」

その時に硝子窓の外から、最前の生蕃小僧が覆面の顔を覗かせる。電光イヨイヨ烈しくなる。

呉羽は虚空を掴んだままの轟氏の両手を避けながら、刺さっている刃物の十字形の<sup>つか</sup>を、鼻紙で用心深く拭い上げ、事務机の一番下の<sup>ひきだし</sup>曳出から生蕃小僧の脅迫状を探し出して、その中の一枚を元に返ししながら懷中し、<sup>ひきだし</sup>曳出の表面に残っている指紋に呼吸を吐きかけ吐きかけ念入りに鼻紙で拭き取っている中に、窓硝子をコツコツとたたく音を聞付け、ハッとして振返る。

窓の外の生蕃小僧、覆面を除き、白い歯を<sup>あら</sup>露わしつつ眼を細くして笑い、ここを開けよ

という風に手真似をする。呉羽はわななく手で曳出しからピストルを取出し、襦袢の袖に包み、引金に指をかけながら近付き、やはり襦袢の袖でネジを捻じって窓を開ける。生蕃小僧は外に立ったまま依然として笑いながら声をひそめる。

「呉羽さん。相変らず綺麗ですなあ」

「……………」

「私あつしやこれで貴女あなたの生命いのちがけのファンなんだよ。ドンナに危ヤバい思いをしても、貴女あなたの芝居

ばっかりは一度も欠かした事はないし、ブロマイドだって千枚以上蓄ためているんだぜ。ハハ」

「……………」

「しかし、心配しなくともいいんだよ。どうもしやせんから……あつしはねえ……」

「……………」

「あつしはね。モウ御存じかも知れんが、貴女あなたや、その轟さんとは相当、古いおなじみなんだ。あつしを手先に使つて、貴女の御両親を殺させた、その轟九蔵って悪党に古い怨恨うらみがあるんでね。タツタ今二千円をイタブツて出て行つたばかりのところなんだが……どうも彼奴あいつの呉れっぷりが美事なんでね。万一、警察さつへ密告さしやしめえかと思つて、途中の自

働電話から彼奴<sup>あいつ</sup>を呼出して、もう一度用事が出来たからと云っておいて、引返してみたら、約束しておいた玄関<sup>と</sup>の扉が開かない。おかしいなと思つて、ここへ来て様子を見ているうちに、何もかも見てしまったんだがね……へへへ……何も心配しなくなつていいんだよ。呉羽さん。ちようど、あつしが思つていた通りの事をアナタが遣つてくんなすつたんだから、お礼を云いてえくれえのもんだ。お蔭であつしも奇麗サツパリと思ひ残すことがなくなりましたよ。へへへ……どうも、ありがとうがんす」

「……………」

「へへへ。だから万が一あつしが検挙<sup>あ</sup>られたつて、決して今夜の事あ口を割りやしません。アンタのしなすつた事は、何もかもアツシが背負<sup>し</sup>つて上げます。ドウセ首が百在<sup>あ</sup>つたつて足りねえ身体<sup>からだ</sup>なんだからね。ハハハ」

「……………」

呉羽はピストルを取落しヨロヨロと後退<sup>あと</sup>りして踏止まり、両袖を胸に抱き締めて一心に生蕃小僧の顔を見詰める。

「ハハハ。その代りにねお嬢さん。万が一にも、あつしが無事に逃走<sup>ふけ</sup>了せたら、どこかで、タツタ一度でもいいから、あつしの心を聞いて下さいよ……ね……」

「……………」

生蕃小僧はうなだれたまま神に祈るようにつぶやく。遠雷の音……。

「しかし、それあ、あつしみてえな人間にとつちや、及びもねえ事かも知れねえ。だから  
万<sup>あな</sup>一御用を喰つちまえあ、貴女の罪を背負つて行くのがタツタ一つの楽しみでさ。へへへ。  
あつしみてえな人間の心あ貴女<sup>あなた</sup>みてえな女<sup>ひと</sup>でなくちやあ理<sup>わか</sup>解つてもれえねえからな」

「……………」

生蕃小僧はチョット涙を拭いてニヤニヤと笑った。

「へへへ。それからね。チット未練がましい長文句になって済まねえが、明日<sup>あす</sup>の朝は、せめてアツシにお線香でも上げるつもりで、出来るだけ朝寝しておくんないね。その轟九蔵の死骸がアンマリ早く見付かつちや困るんだ。銀行へ行つてお金を受取らなくちやなりませんからね。いいかね。お頼ん申しますよ」

と云う中<sup>うち</sup>に姿は闇の中に消えて、声だけが朗らかに残った。

「……オットット……その窓は、そのまんま開け放しといった方がいいね。閉め切つとくと、オマハンの首に縄がかかるんだ。ハハハハハ……」

やがてバラバラと雨の音……烈しい電光……。

あとを見送った呉羽はホツとため息した。そうしてニツコリとあざみ笑いをしいしい入口の扉の<sup>ドア</sup>把手を、袖口でシツカリと拭い上げてから、舞台正面、中央の青ずんだフットライトの前まで来ると、大きな眼をパチパチさせてビツクリしたように場内一面の観衆を見まわした。……すると……その背後の天井裏から新調らしい、真白い<sup>どんす</sup>緞子の幕がスルスルと降りて来て、一切の舞台面を霧のように蔽い隠した。

「ヒヒヒヒヒヒヒホホホホホホハハハハ……」

底の抜けるほど朗らかな、明るい呉羽の笑い声が、満場におののき渡った。

トタンに場内の片隅から、低いけれどもケタタマシイ、慌てた声が上がった。

「芝居だよ芝居だよ。タカが芝居じやないか。ビクビクするな。シツカリしろ……シツカリして舞台を……アツ。いけねえいけねえ。脳貧血脳貧血。チョット誰か……来て……」

そうした若い男の声が、一層モノスゴク場内を引締めた。

しかしその声の方向を振り向いて見る者すら居なかった。場内はさながらに数千の人間を詰めた巨大な花氷のように冷たく凝固してしまっていた。その中<sup>うち</sup>に呉羽の笑い声が今一度華やかに、誇りかに閃めき透り初めた。

「ホホホホホハハハハハ……。いかがで御座います皆様……おわかりになりました？」

轟九蔵を殺したのは私だったので御座いますよ。皆様からこれほどの身に余る御引立を受けまして、轟九蔵からあれほどまで可愛がられておりました私だったので御座いますよ。ホホホハハハハ……。

……その殺しましたホントの理由と申しますのは……どうぞ恐れ入りますが今晚のお芝居を、第一幕から今一度繰り返して御考え下さいまし。当劇場の探偵劇を御ひいき下さいます皆様は、すぐに御察し下さることと存じます。

……私は、父の甘木柳仙が老年になってから生まれました長男だったので御座います。そうして只今も取つて十九歳に相成ります甘木三枝と申す男の子なので御座います。ハハハハホホホホ……私の実父の柳仙は旧弊な人間で御座いましたので、老人の一人子は、その子供の性を反対に取扱つて育てますと……女の児こは男の児この通りに……又男の児こは女の児この通りにして育てますと、無事に成長させる事が出来る……とよくソナ事を申します迷信から、わざわざ私を女の児こという事にして三枝という名前を附けて役場に届けまして、それから何もかも女の児ことして育てられながら、だんだんと大きくなってまいりますうちに、私自身でも、自分が男だか、女だかわからない位、声から姿までも……心までも女らしくなつてしまったので御座います。只今、こう申しております中うちにも皆様はまだ私

を一人前の女と信じ切っておいになる方が、かなり大勢おいでになる事で御座いまいしょう。ホホホホホハハハハハハハ……。

……ところがツイこの頃になりました、そうした女性的な習慣に埋もれておりました私の心が、いつの間にか男性として眼醒め初めたので御座います。そうして今晚のお芝居で、お眼にかけました通りに、あの轟九蔵の執拗い変態的の愛がたまらなく厭になりまして、あの純真なソプラノ歌手の美鳥さんと一所になりたいばかりに、止むに止まらない切ない気持から、あのような無鉄砲な事を仕出かしまして、満都の皆様方に、お詫の致しようもないお心づかいを、おさせ申したので御座います。そうしてその上にも因果な事には、女としての私に恋焦れておりましたあの兇悪無残の殺人鬼、生蕃小僧が、女性としての私を恋する余りに、それこそ生命がけで私の罪惡をカバーしてくれましたお蔭で、やっと今日まで娑婆に生き永らえまして、おなつかしい皆様に今一度、斯様な舞台姿で、お目にかかる事が出来たので御座います」

「芝居だ芝居だ」

「スゴイスゴイ……」

「ああ……たまらねえ」

満場の人々のタメ息が一瞬間笹原を渡る風のように渦巻きドヨめいて直ぐに又ピツタリと静まった。

「……けれども皆様お聞き下さいまし。私は、こうして大罪を犯してしまいますと、今一度、夢から醒めたような気持ちになつてしまいました。静かに自分自身を振り返る事が出来るようになりました。男性として眼醒めました私は、今度は男性としての良心に眼醒め初めたので御座います。私のような鬼とも獣<sup>けだもの</sup>とも、又は蛇だか鳥だかわかりませぬような性格の人間が、あの女神のように清らかな美鳥さんに恋をするのは間違っている。私のこの血腥い呼吸が、ミジンも曇りのないアノ美鳥さんのお顔にかかつてはいけない。私のこの爛<sup>ただ</sup>れ腐った指が、あの美鳥さんの清浄無垢の肉<sup>おからだ</sup>体にチョットでも触れるような事があつてはならぬということを深く深く思い知りましたので、そうした私の心持を、ホンノ少しばかりでもいい、美鳥さんに理<sup>わ</sup>解<sup>か</sup>つて頂きたいばかりに、このお芝居を思い付いたので御座います。……で御座いますからこのお芝居の終り次第に、私の持つておりますものの全部を、心ばかりの贖<sup>はなむけ</sup>として、私の顧問を通じて美鳥さんに受取つて頂く準備がモウちゃんと出来ているので御座います。……美鳥さんは私のこうした気持ちをキツト受け入れて下さる事と信じます。そうしてあの可哀そうな殺人鬼、生蕃小僧の罪名が、すこしでも軽く

なるように、心から世話して下さるに違いないと思います」

「シバイダ……シバイダ……」

「ホホホホ……まったくで御座いますわねえ。この世は何もかもお芝居で御座いますわねえ……。ですから私も、こうして最後のお芝居を打たして頂きまして、私の一生涯を貫いておりますこのノンセンスこの上もない怪奇探偵、邪妖劇の幕を閉じさして頂くので御座います。……生蕃小僧と手に手を取って絞首台へ登るような作りごとはモウどうしても出来なくなつたからで御座います。私は、私の真実にだけ生きて行きたくなつたからで御座います。」

……おなつかしい皆様……お名残り惜しゅう御座いますが天川呉羽は、もうコレツキリ永久に皆様の前から消失せなくてはなりませんきえうね。

……では皆様……さようなら……御機嫌よう御過し下さいませ」

低く低く頭を下げた天川呉羽の、大きな水々しい前髪の蔭から玉のような涙がハラハラと滴り落ちるのが、フットライトに閃めいて見えた。

「シバイダ……シバイダ……」

「……バ馬鹿ッ……芝居じゃないゾッ……芝居じゃないんだぞッ……ト止めろッ……」

突然に叫び出した浴衣がけの若い男が一人、最前列の左側の見物席から、高い舞台の板張に飛付いて匍い上ろう匍い上ろうと藻掻き初めた。それを冷然と流し目に見た天川呉羽は、慌てず騒がず、内懐に手を入れて、キラリと光るニッケルメッキ五連発の旧式ピストルを取出した。自分の白い富士額の中央に押当ててシツカリと眼を閉じた……と思う中に、

……轟然一発……。

美しい半面をサツト真紅に染めた呉羽は、ニツコリと笑って両手を合わせた。背後の白幕に虹のような血飛沫を残しながら、フットライトの前にヒレ伏した。

トタンにヤツト見物席から匍い上った浴衣がけの男が、飛び上るように呉羽の身体に取付いた。綺麗に分けた髪を振乱したまま正面に向って悲壮な声で叫んだ。

「ダ誰か来てくれッ。芝居じゃないゾッ」

それは大森署の文月巡査であつた。その中に幕の横や下から笠支配人を先に立てた四五人が馳寄つて来て、呉羽の身体を無造作に、向って左の方へ抱え上げて行つた。

冷やかなベルの音に連れて、天井裏から真紅の本幕が静々と降り初めた。その幕の中央には眼も眩ゆい黄金色の巨大な金文字で「天川呉羽嬢へ」「段原万平」と刺繍してあつた。

万雷の落ちるような大拍手、大喝采が場内を狂い渦巻いた。ビュービューと熱狂的な指笛を鳴らす者さえ居た。

そうして先を争う蛆虫うじむしの大群のようにゾロゾロウジャウジャと入口の方向へ雪顔なだれ初めた。

「シバイダ……シバイダ……」

「ドコマデモ徹底的な写実劇だ」

「スゴイスゴイ深刻劇だ」

「……バカ……そんなのないよ。怪奇心理劇でんだよコレア……」

「ああスゴかった」

「ステキだった」

「あすこまで行こうたあ思わなかった」

そうして又、思い出したように方々から振返って拍手の嵐を送るのであった。

しかし、その大勢の中にタツタ二人だけ、拍手しない者が居た。それは正面、特等席の中央に居る江馬兄きょうだい妹であった。

江馬兄妹はそこに作り附けられている人形使節か何ぞのように、無表情な両眼を一パイ

に見開いて、幕が降りてしまった舞台の中央を凝視していた。満場の人影が残らず消え失せてしまった後までもまだ揃って頬を硬ばらせたまま瞬<sup>まばたき</sup>一つせず、身動き一つしないまま一心に真紅の幕を凝視していた。

## 青空文庫情報

底本：「夢野久作全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年10月22日第1刷発行

初出：「オール読物」

1935（昭和10）年9、10、11月号

※冒頭の罫囲みには、底本では波罫が用いられています。

※疑問点の確認に当たっては、「夢野久作全集5」三一書房、1975（昭和50）年6月15日第1版第4刷発行を参照しました。

入力：柴田卓治

校正：kazuishi

2001年7月24日公開

2012年10月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 二重心臓

夢野久作

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>